

世界气象观测报告書 2

气象观测协会
W
R
A





目次

一、「指 示」	3
二、軍総攻撃・人民総武装の準備指令ありる！	7
三、ゲリラ戦の正面的大攻勢に向けて、各大衆戦線の指導を強化し、中央軍拡充運動に結合させ、赤軍を更に強化増強せよ！	11
四、革命戦争の陣型の下、持久的ゲリラ戦を組織せよ！	14
五、旧「戦闘団」主義脱盟グループの革命的復盟を喜び、苦悩の教訓を共産主義運動の飛躍の糧とせよ！	16
六、東京地方委の再建を軸に「日韓―狭山―三里塚」大攻勢を勝ち取り、革命戦争派の全国学生戦線を飛躍拡大せよ！	20
七、即自的階級形成論の自然発生性批判―「関西赤軍」の統一戦線―戦線指導について―	24
八、「反スタ」体制間矛盾論・「第三世界」合流論を止揚し、「反スタ論」の変種―「反社帝論」の日和見主義を批判する！(反スタ派への屈服―「一向過渡期世界論」の毛派的改作について)(13に続く)	33
九、第二回中央委―政治報告(続) 第三節 中央集権―非合法党の組織戦を全戦線に拡大し、帝国内革命戦争を勝利せよ！	44

- ◎万国の労働者被抑圧人民は団結し 世界革命戦争—世界プロ独—社会主義—共産主義建設の共産主義革命に勝利せよ！
- 世界同時革命勝利！
- 国際帝国主義を反帝プロレタリア革命戦争—世界革命戦争で打倒し 世界プロレタリア独裁を樹立せよ！
- ◎現代日和見主義—現代修正主義を粉碎し 世界党—世界赤軍—世界革命戦線を建設せよ！
- 日本プロレタリア—ト人民は 反帝植民地革命戦争を世界革命戦争に揚棄し 国際帝国主義の侵略反革命戦争を粉碎せよ！
- 侵略・抑圧・反革命—差別分断支配攻撃粉碎！
- 安保—NATO—ASEAN—国際反革命同盟粉碎！
- ◎米帝国主義の対日反革命粉碎！
- 日本帝国主義打倒！
- 社会民主主義—社会ファシズム勢力の反革命策動を粉碎し プロレタリア独裁の権力機関—世界革命戦争の闘争機関—臨時革命政府(革命戦線政府)を樹立せよ！
- ◎非法中央集権—職業革命家の党、軍事組織—労働者地下細胞の党を全戦線に配置せよ！
- 党の軍隊を中軸とする革命武装勢力建設！
- 労働者を基礎とする被抑圧人民の統一戦線建設！
- 反帝プロレタリア革命戦争を闘い取る正規の攻囲建設！

「指 示」

親愛なる同志諸君！

(一)軍事委員会の報告と(二)蜂起準備の組織に関する問題の覚え書、プラス(三)組織図を送ってくださったことにたいし、諸君にあつく感謝する。これらの文書を読んで、同志的に意見を交換するために、軍事委員会に率直に話しかけることが私の義務であると考えた。いふまでもなく、私は任務の実践的な組織について判断しようというわけではない。ロシアの困難な事情のもとで可能なことはすべてなされていることは、まったく疑う余地がない。だが文書から判断すると任務が形式主義になりかわってしまう恐れがある。軍事委員会のこれらすべての図式や、組織計画は、文書の渋滞という印象をあたえる。

率直ないい方を許していただきたいが、諸君は私がケチをつけたがっているなどと疑わないものと思える。こういう問題では、図式や、軍事委員会の機能や権限について論争したり、おしゃべりしたりする事は、なによりも無益な事だ。ここで必要なのは、猛烈なエネルギー、またエネルギーだ。

半年以上も爆弾について論じながら、一つの爆弾もつくらなかったという事は恐ろしい事だ。じつに恐ろしい！ としてしゃべっているのは博学きわまる連中なのだ。

諸君、青年のところへ行きたまえ！ これだけがすべてを救う唯一の手段である。さもないと諸君は決して間に合いはしない。(私は全てから判断してこうみる。)そして「博学な」覚え書きや計画、図面、図式や立派な処方箋はあっても、何の組織もなく、なんの生きた

任務もない、ということになるだろう。

青年のところへ行きたまえ。ありと全ゆるところへ、学生のところにも、とくに労働者のところにも、その他のところにも、すぐに武装革命部隊を設立せよ。いまずぐに、三人から十人まで、三十人まで等々の人数の部隊を組織させたまえ。

いまずぐに彼ら自身でできる方法で、ある者はピストルで、ある者はナイフで、ある者は放火用に石油をしませたボロ布などで、武装をさせたまえ。今すぐこれらの部隊に指揮者を選出させ、なるべく、ペテルブルク委員会所属の軍事委員会との結びつきをもたせたまえ。

どんな形式も要求するな。後生だから、図式などはいっさい放っておきたまえ。どうか「機能、権限、特権」などはいっさい葬りさってしまったまえ。ロシア社会民主労働党に必ず入るように、などと要求してはならない。これは武装蜂起にとってはばかげた要求だろう。

どんなサークルとでも、それがたとえ三人のサークルであっても、警察関係は安心してよく、ツアー軍と闘う用意がある、というただ一つの条件が守られるなら、結びつきを拒否してはならない。サークルが希望するなら、ロシア社会民主労働党に加入させるか、党の同調者にさせたまえ。それはすばらしい事だが、それを要求するのは、無条件に誤りだと私は考える。

ペテルブルク委員会所属の軍事委員会の役割は、これらの革命軍部隊を援助し、連絡その他のための「事務局」の役を果すべきものであるべきだ。諸君の奉仕なら全部隊が喜んで受け入れるだろうが、もしも諸君が、そのような仕事に於いて、図式や軍事委員会の「権限」についての演説からはじめるなら、諸君はすっかり事をだめにしてしまおうだろう。断言するが、とりかえしのつかない程だめにしてしまおうだろう。

ここでは、広く説いてまわることから活動しなければならぬ。週に五人から十人の人間に、何百もの労働者や学生のサークルをまわらせ、できさえするならどこにもめぐり込ませ、あらゆるところで簡単明瞭で、単純率直な計画を提案させたまえ。その計画とはこうである。ただちに部隊を編成し、できるもので武装し、全力を尽して活動せよ。我々も諸君をできる限り援助するが、我々をあてにしてはならない。諸君自身で活動せよ。

このような任務の重心は、多数の小さなサークルのイニシアティブにある。これらのサークルが万事をやるだろう。これらのサークルなしでは、諸君の軍事委員会全体はないに等しい。私は軍事委員会の活動がどのくらい生産的であるかを、委員会と結びつきをもっているこの様な部隊の数で計るつもりだ。もし、一、二カ月たってもペテルブルクで軍事委員会が最小限二〇〇から三〇〇の部隊を持っていなければならぬ。それはもう、死んだ軍事委員会である。その時はそんなものは葬ってしまわなければならない。沸きたっている現在にあって、何百かの部隊を集め得ないというのは、現実の外に在るという事だ。

説いてまわる人達は、各部隊に、爆弾のてっとり早い、ごく簡単な作り方を教え、活動の方式全般について、最も基本的な事を話し、そうした後は、全活動を彼ら自身に任せねばならない。部隊は、ただちに、即刻の一連の戦闘行動によって軍事訓練をはじめなければならない。ただちに、である。

ある者は即刻、スパイの殺害や警察署の爆破を実行し、他の者は蜂起の資金を没収するために銀行を襲撃し、さらに他の者は機動作戦や、見取図をとる、などの事を実行するだろう。

だから、今すぐ始めねばならないのは、実地に学ぶ事である。こういった実験的な攻撃を恐れてはならない。もちろん、これが極端にはしる事もありうるが、しかし、それは明日の禍であって、今日の禍は我々の沈滞に、我々の空論主義に、学識家ぶった融通のなさ

に、年寄りじみてイニシアティブを臆する事にある。

各部隊は、たとえ巡査を皆殺しにしても、自分で学ぶようにさせたまえ。何十人かの犠牲も、何百人かの経験をつんだ闘士を生み出す事で報われてなおあまりある。そして明日には、これらの闘士が数知れない多くの人々をひきいて進むであろう。

同志諸君！ かたい握手を送り、成功を望む。

私は決して自分の見解を押しつけはしないが、発言権を行使するのを義務と考える。

諸君のレーニン

「サンクト、ペテルブルク委員会所属の軍事委員会へ」
(「レーニン全集」第11巻 三三六―三三八ページ) —

軍総攻撃・人民総武装の準備指令おける！

— 10/8以降10年の全蓄積を世界革命戦争の攻勢開始へ向け継承 —

☆国境を突破する革命戦争で第二次世界大戦をのりこえ、国際階級闘争を世界革命戦争へ止揚し、世界プロ独を樹立せよ！

☆プロ独綱領に規定されるプロ独政策を統一戦線政策—階級形成政策として貫徹し、全反帝闘争をプロ独闘争として確立せよ！

☆60年代階級闘争総括と連合赤軍・ウエザーマン・西独赤軍総括を発展させ、帝国内共産主義者の任務を鮮明にし、共産主義者党—世界党に結集させよ！

同志、戦友諸君！

中央委員会は遂に77年秋にむけて帝国主義本国—日本に於ける戦争の一大総反攻の指示を中央軍—赤軍および全機関—戦線に対し発した。中央軍の同志と赤軍の戦友達はすでに手元に降りている指示でもってこの秋の戦闘計画を実戦態勢として着々と進めている。党の全部局—機関もこの計画にそってそれぞれの任務と活動を開始している。全細胞—黨員諸君には各級党機関より各戦線への指導内容も含めた指示が近日中に届けられよう。

75年以降の軍を軸としたゲリラ戦の勝利と党の指導する各大衆戦線の反帝闘争に於ける拡大およびとりわけ77年以降の各大衆戦線の反帝戦線—革命武装勢力への大衆的武装闘争の勝利を通じた飛躍、この全成果をこの秋の攻勢を通じて帝本国革命戦争の対峙段階をつくり出し、もって文字通り世界革命戦争の攻勢段階を戦取しなればならない。

問われているのは何か。それは将に共産主義であり共産主義革命である。

闘いの方向は何か。それは将に単一の世界革命戦争であり世界プロ独の樹立である。

このことに全ての闘いは止揚させねばならない。プロ独—共産主義革命の闘いである。

その為にかそ一切の戦闘と準備がなされなければならない。

世界プロ独へ向けた大衆的闘争を組織し、それを打ち鍛え、階級形成をプロ独運動として確立し、共産主義運動と連動させる。この為にかそ共産主義党の共産主義綱領とプロ独綱領—政策が闘いの中で創られてゆくのである。

68年10/8以降、10年の月日が流れた。

この10年間、我々はいかに闘い、いかに成長してきたのか。10/8を本当に越える事ができたのか。我々は再びこう問わねばならな

い。10/8記念を、10周年を語る諸君と決別しようではないか。我
我は我々自からの闘いで10/8を切り開いたが故、この10/8を発
展飛躍させる事を切り拓いて来たが故、そして我々自身の幾多の敗
北を確認するが故、我々は10/8以降10年間のその全歴史をいま一
度飛躍させる為に冷厳に見つめたいと思う。

そして明日の地球を回さねばならないのである。

帝国主義の侵略や反革命、そして戦争に対する一般的反抗や抵抗
から、共産主義の実現へ向けて、将に共産主義革命を勝利させる為
に、いま一歩能動的に国際階級闘争そのものを把え返し、実践的な
闘い、能動的な共産主義者の任務として、国境を越えた単一の世界
革命戦争と世界プロ独の樹立へ向け、我々の闘いを整列させねばな
らない。

帝国内共産主義者とプロレタリアートの任務は、世界帝国主義
の打倒と世界プロ独の樹立へ向けた自国帝国主義打倒—祖国の革命
的敗北の為の闘いであり、それは将に国際階級闘争の最前線にある
「第三世界」の国際帝国主義に対する反帝植民地革命と階級闘争の
同質性一性を有する、きわめて国際的・世界的任務である。

そしてその闘いこそ、革命戦争であり階級間総力戦であり、すな
わち今日までの全ゆる革命が結局そうであったように暴力革命であ
る。

闘いの陣型は、将しく世界単一の革命軍、革命の機関車、世界赤
軍であり、その政治表現としての世界革命戦線であり、それを共産
主義へ向けて指導し抜く世界党の共産主義者党としての建設である。

今一度、世界同時革命が思い起こされねばならない。それは決し
て時間的同時でもなければ地理的同時性でもない。国際帝国主義
に対する革命運動の同質性であり、世界革命戦争としての一元化の
問題であり、世界党—世界赤軍—世界革命戦線建設の問題である。

世界にむけて我々は飛翔した。一度ならずである。70年ハイジャ
ック闘争しかり、72年以降の日本赤軍の闘いしかり。そして今再び
世界から日本へ、帝国主義本国へ、革命戦争の飛翔が開始されつつ
ある。

織された暴力とプロレタリア国際主義」の路線がある。国際反帝闘争
を帝国主義内部で息づかせる戦略を持っているのだ。
確かにブント六回大会の岩田危機論を軸にした中核派なみのマル
ク理論を骨格とはしているが、すでにそれは関西を中心にして大き
く理論的にも乗り越えられつつある。後に残されているのは具体的
実践だけである。

国際階級闘争はすでに大きなうねりを創り始めていた。60年代中
半以降、国際帝国主義は膨大な過剰資本の処理をめぐりIMF・G
A T T体制を崩壊させる相互のブロック間競争を開始していた。ベ
トナムは60年代前半のアルジェリア、キューバの反帝植民地革命を
受け継いで、正面から国際帝国主義の主軸米帝との戦争を展開して
いた。帝国主義内部でも青年運動・学生運動を軸とした急進主義運
動が世界的同質性をもって起こりつつあった。労働者国家では、チ
エコの新しい波、そして中国の文化大革命が、それまでの「社会主
義」国家の政治構造を大きく創り変えようとしていた。

世界を、平和共存という枠内で治められる時代は終ろうとしてい
た。帝国主義も「社会主義」国家も後進国も、全世界的な激動が訪
れつつあった。将にベトナムを先頭として。
ブントが将に応えんとしたのは、この国際階級闘争としての反帝
闘争の日帝内での展開であり、国際反帝闘争の一環としての実力闘
争であった。反帝闘争機関としての位置を、それまでの単純な学生
政治同盟の規定を止揚するなかで勝ちとしていた社会学同は、この羽
田闘争に於けるゲバ戦の意味を最も能動的に把えていた。反
帝闘争戦士としてベトナムの解放戦線戦士がそうであるように「生
きるか死ぬるか」の固い政治的決意と思想性が要求される。社会学同
にとって、これは、それまでの自然発生的なゲバや武装とは明確に異
なっていた。だが一般的デモやカンパニアで自己の国際主義的任務
を語る者とは決別すべき時が来ていた。たとえこの闘争で社会学同が
つぶれても、「組織された暴力とプロレタリア国際主義」の路線は残
る。

闘いは早朝の鈴ヶ森ランブウェイ突破の勝利によって、すでに全

一 国主義者や平和主義者の理解を大きく越えるこの世界革命戦争
の嵐は、今再び革命の世界性・革命の現実性として多くの大衆を把
えつつある。

今こそ我々は再び全人民に告げねばならない。「国境を突破せよ！」
「全人民の武装—赤軍建設を戦取せよ！」そして「共産主義革命に
勝利し、世界共産主義を実現せよ！」と。

第一次ブント以降の輝やける我々の基本路線、「世界革命」「暴力
革命」「共産主義革命」の三つのスローガンを、そして第二次ブントの
発したあの10/8を組織し抜いたスローガンを「組織された暴力とプ
ロレタリア国際主義」を今こそ「人民総武装・革命軍—赤軍建設！」
「世界革命戦争勝利—帝国内革命戦争勝利！」そして「帝国主義
打倒—世界プロ独樹立！」として全闘争の基本路線として確立化し
なければならぬ。

今、世界は燃えつきようとしている。古い世界は崩壊しつつある。
今必要なのは、明日の地球を回す思想と政治、そして軍事である。
世界革命戦争への飛翔！ そしてその日本への逆流！ ××××
××に結集せよ！

今秋期決戦の勝敗は70年代後期を決める

— 60年代10/8の必然性と70年代 —

67年10月8日、我がブント社会学同は早朝からの闘争に備え、す
でに一切の意志統一と武装準備を終えた。中核派・解放派はこの
10/8を単なる「ベトナム反戦」カンパニアとしてしか扱っていない。
一切の政治過程を階級関係と国際情勢から把え返すという事を
なし得ない彼らは、この60年代後半の問われていた課題にまったく
無自覚になっている。問題は、ベトナムを先頭とする国際反帝闘争
を帝国主義内部に持ち込む事であり、国際反帝闘争の一部として日
帝内の政治攻防を再編化する事である。「ベトナム反戦」ではなく
「ベトナム革命勝利」こそ一切の環にしなければならない。この
政治課題に込められているのは唯一ブントだけしかない。ブントには「組
局を大きく決めていた。中核派・解放派も、集会でこの社会学同の戦
闘の報を聞きやいなや、集会を途中でできりあげ、羽田周辺の橋へと
隊列を進めた。早朝の戦闘に勝利した社会学同の部隊も橋近くへ登場
する。社会学同の突撃はここでも続けられる。カンパニアとしてしか
ゲバ闘争を位置付けきれない尖核派・解放派は、橋を渡ってみても
それ以上何をしても良いのか判らない。だが社会学同は將に日帝権力—
機動隊そのものが打倒対象であるという事を位置付け得ている。10
/8の一日中、社会学同は幾度となく突撃をくり返した。
ここに世界革命闘争の、日帝での再度の烽火が、10/8をして大
きく燃えあがったのである。

10/8闘争が、続く68年のエンブラ—王子—成田の闘争から10/
21防衛庁闘争、そして69年4/28—11月決戦を軸とする60年代後半
の政治課題に対する反帝闘争を引き起こし、その政治性社会性の総
体性は68—69年の全国学園闘争を爆発させるものとなった。

この60年代後半の階級の激突の質が、それ自身、いわゆる反帝闘
争としての自然発生的に色濃く規定されていたとは言ってもない。
確かに急進主義一般であったかもしれない。しかし60年代後半が、
いわば第二次世界大戦以降のヤルタ—ジュネーヴ体制とも言うべき
世界の分極構造を大きく変化させる時代と闘いとしてあったという
事。この事に規定された国際階級闘争の激突の不可避性に規定され
た帝国主義内部での反帝闘争の激突の自然発生的性。すなわち、その
反帝闘争がすぐれた歴史的世界の必然性をもって登場したという
事を確認しおこななければならない。ブントはそれに対して、将
に組織をあげて応えんとしたのである。「組織された暴力とプロレ
タリア国際主義」の路線は、60年代後半の国際階級闘争を規定する
世界的戦略であったし、革共同の「反帝反スタ」や解放派の「先進
国同時革命」の平板な路線を、大きく引きはなす事ができたのであ
る。反帝闘争の先進部隊として自己規定をしてきたブント—社会学同
に対して、「党がなかった」という批判は、何の総括にもならないで
あろう。党は最初からなかったものであり、党としては最初から進ま
なかったものであり、いや、逆に、平板な党である事を拒否し続けて

きたのがブントであったのである。だがそのブントが国際階級闘争と共産主義に對して最も誠実に応えんとしてきた事は、まぎれもない事実である。そうであるが故に自己の民主主義急進派の限界を党内闘争から党分裂という形で問われた70年代への道を選択したのである。

60年代後半の世界的激動の波が、国際反帝闘争の急進主義的波及として全世界を燃えさせたせ、その波に最もリアルに応え、かつ自己の再度の止揚を国際階級闘争から要求されたのがブントであった。

反帝闘争の国際的波及とその権力問題―革命の問題への逢着、そして一方では、それを指導しうる世界党建設の問題、將に単一的に全世界を問いかけたこの課題に對して、ブントは「武装蜂起」と「世界党―世界赤軍―世界プロレタリア統一戦線」という地平で応えた。70年代を規定する闘いの基軸として。しかし応えたブントはそれを実践する地点で將にもろくも崩壊せざるを得なかった。この課題に應えるには、あまりにその思想性は弱かったし、その党派性は大衆運動主義的であった。

XXXXは唯一この課題を担い、実践し、そして闘いの失敗を幾多こうむる中で、しかしこの課題に應える為今日未だその闘いをやめようとはしない。

60年代後半に問われた課題、日本に於いては10/8が切り拓き、登場させた課題、その一切は70年代後半に突入する今日にあって、將に革命主体の側において、生きた階級闘争の実践としては未だ応えきれていない。

世界革命戦争―世界プロ独―世界共産主義勝利の闘いに応えきる事、それはただ単に綱領やスローガンでそれを掲げるという事ではなく、かつての10/8がそうであったように、將に実践的闘いの中でこそ鮮明に指し示されねばならない。

70年代のXXXXが、將に幾多の困難性と幾度も敵からの襲撃を受けながらも、その都度、より大きな質をもって復活してくる歴史の必然性こそ、この問われている課題への不可避の解答の為である。我々は、この闘いの十年間で、全世界に對してこの課題を応えん

としてきたし、そして今再び大衆的大登場をもって応えようとしている。今秋期闘争こそ、この闘いの大爆発の時であり、苦節の70年代を自らの軍事闘争で乗りきってきた軍と、そして新たな階級武装を獲得した革命武装勢力の反帝戦線部隊は、兩者一丸となって全ゆる形態の攻撃を、帝本国内革命戦争―世界革命戦争の公然とした登場をもって加えるであろう。

全同志・兄弟達！

今秋期軍事決戦に参戦せよ！

ゲリラ戦の正面的大攻勢に向けて、各大衆戦線の指導を強化し、中央軍拡充運動に結合させ、赤軍を更に強化増強せよ！

中央組織局

革命戦争の主力である赤軍正規軍を、革命戦争を切り拓く全部隊の統一戦線部隊、すなわち革命戦線の軍事部隊として、全ての部隊地下組織、そして個人の赤軍への結集を勝ち取り、帝国主義国内での統一された革命軍の圧倒的増強を戦取せよ。

赤軍への軍事指導部隊である党中央軍を党拡大闘争を通じて拡充し、きたるべき正規軍の大攻勢への戦争体制を強化せよ。

反帝戦線部門を急速に軍事体制化し、地下体制・非公然指示系列、そして武装強化を計り、反帝闘争の現場闘争を、その重要な訓練の闘いとしても位置付け、反帝戦線を革命戦線に赤軍に飛躍させる闘いを発展させよ。

同志諸君！ 党・軍の戦友・兄弟達！

日本革命戦争の次の段階への突入の時期はせままっている。七〇年初頭の第一期革命戦争と七四年以降の第二期の、それぞれの闘いが築いた革命的高地を、我々は赤軍と党中央軍を先頭にして更にいま一步押し拡げる闘いに突入せんとしている。

世界革命戦争の勝利的対峙段階である七〇年代中期から後期の闘いは、「第三世界」の反帝反植民地革命闘争のインドシナを先頭にすする圧倒的前進と、それに規定された帝国主義世界プロレタリア―国際帝国内主義の圧倒的危機―後退、そしてそこから、より徹底した反革命再編を主軸とする侵略体制―戦争体制の強化にファシズムの前進、そして他方では社会排外主義・社会愛国主義へと純化しつつある「一国社会主義国」のそれぞれの限界と反革命化、この三極構造の中で、その対峙段階を世界プロレタリアートにとっての攻勢へと移行させる階級的激突が、將に帝国主義国内革命戦争の前進と対峙段階への逢着という緊急の課題として世界プロレタリアートから帝国内プロレタリアートは突きつけられている。

日帝にあっては、他の帝国主義に比してその侵略反革命体制への暴力的移行は急ピッチである。

この間の「三里塚鉄塔めくう撤去」あるいは「狭山上告棄却」そして「韓国内民主化への朴の圧倒的弾圧と日帝擁護」は一体何を示しているか。

これこそ帝国主義ブルジョアジーの本格的ファシズム移行への決断以外のなにもものでもないのである。

巨大独占の集中集積の徹底化―経済の軍事化、国家官僚の統制支配体制の完全化―議会の無力化、帝国主義労働運動の全面的登場―民間労働運動の排外主義的屈服、この三大基軸を状態展開の核にすえて、日帝ブルジョアジーは、司法体制の国内支配態勢の一環としての確立、情報マスキの総支配から国民総管理化、そして警察―自衛隊の侵略反革命常備軍としての増強、という將に一切の再編を暴力的展開として貫徹しようとしている。

このファシズム再編の基本構造は、国際帝国主義の現実的動揺と危機によって、將に一時的に取らざるを得ない矛盾の国内転化として膨大なる「階級危機」の創出たるスタグフ攻撃にインフレ+不況の「危機」の人民転化であり、しかしその政策は、自らの階級支配を不断に動揺させるものとして存在するが故に、次の更なるそして最後の延命策、侵略―戦争および軍拡競争にその道を取らざるを得ない。その為の再編にむけた一大階級攻撃なのである。

国家統制官僚の主導によるこのファシズム化は、すでに七〇年代の数々の「事件―動揺」に於いて政治的に作動してきたし、その最終的発動がこの間の一大攻勢である。政府―官僚―司法―警察―民間、この五つの基本ラインは、七〇年代中期の総括のうえで、七〇年代後半へむけての階級的決断を徹底した反革命弾圧として確認し

たであろう。

その結論が「三里塚」「狭山」「日韓」への強権的発動であり、七年七七八八にむけてこの徹底した官僚統制は、政党内閣と労働者闘争への弾圧を更に加え、その成果をもって七八年中の「総選挙」での自民党単独安定政権化をもくろんでいる。そして、もとよりそれが安定政権としては存在し得ないであろうという確認が、それとあわせての更なる官僚統制支配攻撃を強化させ、帝国主義ブルジョアジーの国内安全弁を造るという階級の悲願にむけてそのテンポは急ピッチとなるであろう。

今日、「日韓—狭山—三里塚」を頂点として、この帝国主義の侵略反革命攻撃に対する膨大な抵抗の大众的闘いが、反帝国主義闘争として全国至るところで爆発しており、大衆の自発的闘争は将にとどまるどころを知らない。

そしてその大衆的抵抗闘争の存在こそが、反帝闘争の持久的なうねりこそが、逆に帝国主義ブルジョアジーをして、階級解体攻撃の徹底化としてのフアンズムへの選拓をなさしめたのである。

将に階級闘争の基軸は、プロ独かフアンズムかの決定的選択の時期へと突入し、それは明確な階級の暴力対決Ⅱ階級戦争の血で血をあらう戦争対決へと全階級をまきこんだ転換期へと移行している。フアンズム派は帝国主義ブルジョアジーの指導下で官僚—軍隊—民間ブルックとして、政治部の自民から日共までの戦線を確立させつつ、階級支配の統合軸を国家—排外主義の侵略反革命統合として推し進め、将に「戦争体制Ⅱフアンズム」を全国民課題とし、それを限らない「暴力支配」として展開しつつあるのである。

この侵略反革命軍事支配体制に対する最大の対抗力こそプロ独—革命戦争派の全人民的な大衆抵抗戦線—反帝戦線の武装的建設であり、そしてその軸は何よりもプロ独の階級の権力の支柱—共産主義部隊Ⅱ赤軍の圧倒的軍事的存在であり、共産主義権力とプロ独権力の実践的執行としての革命戦争のフアンズムに対する間断なき実行である。

今日のこの階級攻防の大転換の時代に全ゆる勢力が様々な動揺と

に粉砕しうるなどというのは徹底した茶番である。三〇年代危機に於ける特徴的であったこの闘いが、たとえばイタリアで、ドイツで、スペインで、いかにして敗北していったのか、それも「圧倒的な少数派」であるフアンズム武装集団に解体されてきたのかを、もう一度学ぶ必要がある。

そしてある意味で「暴力革命派」を自認する諸君。「蜂起—内戦—革命戦争」を闘うと主張する諸君。彼らは前二者とは、一見軍事問題—権力闘争に於いては正常であるかのように見える。ただし理論上のみであり、はなはだ空論的にはあるが。彼らは蜂起—内戦を闘うという。しかし一体、いかなる部隊で、いかなる戦闘形態で闘おうというのか。ヘルメット武装の大衆運動的「軍隊」でか。火炎ビンと鉄パイプを武器としてか。党派宣伝的に大衆闘争が昂揚した時に新聞の三面記事にぎわすだけの「放火」や「殺し」の軍事内容で蜂起をやるうというのか。大衆運動の延長の軍事と軍事力量で、完全武装の反革命軍のプロフェッショナルと「決意一般」で闘おうというのか。ましてや「革命戦争」を「宣伝」ばかりし続け、しかしその闘いを一度もやってみようともせず、ましてやその態勢を削ろうなどは、一度たりとも考えた事のないような「暴力革命派」などは論外である。良心的な急進主義者の「決意主義的軍事」にしても、また単なるアジェンションのみの「軍事派」にしても、蜂起—内戦に至る主体形成Ⅱ階級形成と軍建設のまったくの欠落と、その主体的限界をただ大衆運動上の「決戦」という戦術的急進性でおおいかくすという彼らは、結局は軍事と権力の問題を「空想的」に考える事に於いて、議会主義派—セネスト派と何ら変わりはないのである。

第一の潮流、社民—日共。

第二の潮流、協会派—カクマル—四トロ—構改—毛派。

第三の潮流、中核派—解放派—ブント系。

彼らの権力問題に対するそのあまりの「おろかさ」に、我々は今や驚嘆とあわれみさえ覚えるのである。軍事問題ひとつとってみても、彼らが決して真の「革命主義者」ではないという事を痛感させ

その中から自からの本来の姿をさらけ出しつつある。

ことと問題が革命の問題、権力の問題、共産主義とプロ独の問題に達着した時、その各々の勢力の本質は明らかになってしまったのである。単純に権力奪取と権力樹立の問題に於いてさえその分岐は明確である。

「暴力革命」を否定する「広範な—平和革命主義者連は、あくまでもブルジョア議会に於ける議員多数派をもって「革命」への進展があるとする。選挙を媒介にした国民的多数派の存在こそがその根拠であるとする。革命への民主主義的発展は不可避だとも言う。確かに「民主主義的発展」は不可避ではある。それは「議会多数派」に對する「民主主義と自由を守れ」という民主主義派と登場する強度に訓練集権化意識統一を誓った警察軍—自衛隊軍の反革命軍隊の登場発展として不可避なのである。警察軍—自衛隊軍の反革命軍としての政治的技術的そして思想的な強固さは、量的に合せて六〇万軍隊ではあっても、それに結合するフアンズム派—国民主義派の量的部隊の存在を含めて、純粹に軍事的に見ても、たとえ一〇〇万の労働者の決起と数百万のストライキ包囲があつたとしても、明確に一瞬にして粉砕されざるを得ないのは自明の理である。古今東西の歴史を見るまでもなく、近くはチリの実験でもそうであつたように、議会の存在がその本来の目的を達成しようとするならば、その軍事的解体は必然であり、もし生き残ろうとするのであれば、かつての人民戦線しかりその大膽な路線転換を要求されるのである。

セネスト—権力奪取を掲げる諸君はどうか。これも結局は「議会主義派」と同じ土壌でその政治を存在させるのであるが、彼らの若干まじな点は、反革命軍事に對する一定の考慮がそれなりにあるという事である。しかもその過小評価としての判断が、である。たとえ権力移行時に幾千万のセネスト体制が全国的に存在していても、反革命軍は何のためにもなく中核と主要な全国機関を押さえ、圧倒的軍事力でセネストの中軸部隊を壊滅させ、その力でセネスト体制を一挙的か個別的是か別として、完全に壊滅させるまでその軍事行動をやめぬであろう。セネスト武装さえあれば反革命軍隊など量的

られるのである。我が党—軍は、これら一切の敗北主義者—平和主義者達をしりぬに、ひたすら戦争行動を通じた戦争態勢—軍事部隊Ⅱ赤軍の拡大の將に「闘争」を闘い抜いている。

我々は、赤軍の統一革命軍としての更なる大衆的拡大を勝ち取らねばならない。我々は赤軍の中核指導部隊として我が党の中央軍を更に全党よりえりすぐった強固な軍事カードルによって拡充させねばならない。

我々は、全党員—党細胞が軍事組織として党の基本任務として赤軍での全ゆる形態での闘争を、その党活動の第一として闘い抜かねばならない。

そして、その為こそ、我々は我々の指導参加する全ての反帝組織—大衆闘争機関の中で、革命戦争の必然性を説き、赤軍への参加を訴え、そして共産主義党への加入を工作しなければならず、その闘いの中で反帝闘争—大衆闘争そのものを、自然発生的なそれからプロ独—共産主義革命への政治闘争へと発展領導しなければならぬ。この任務は急用である。

革命戦争の陣型下、持久的ゲリラ戦を組織せよ！

農民、労働者、共産主義戦士諸君。とりわけ、十一年にわたる国家権力との攻防の中で、日本階級闘争史上不滅の階級の事業を戦取した三里塚芝山空港反対同盟に結集する革命戦士諸君。諸君の獲得したこの革命的高地は、進軍する世界プロレタリアートの革命的戦果であり、日本プロレタリア人民の希望である。帝国主義ブルジョアとその政治委員会―国家権力の圧制と暴力的専横のくびきの下で墜落を深める労働者人民にとり、屹立する岩山大鉄塔こそその階級の未来であり、闘う三里塚農民の突出する英雄性の象徴であった。同時にそれは、その階級の死滅を予見する敵ブルジョアジーの墓石であった。今や彼らにとって、自らの階級意思を体現するブルジョア法体系も、その民主主義的粉飾も怪格となりつつある。国家権力―司直―公団の三位一体の鉄塔撤去策動の強権の非合法こそ、自らの階級の延命を賭した無制限の、あらゆる手段をもってする決意の表明であり、階級間対立の非和解性の表現である。敵は、一握りの工業ブルジョアジーである。進行する帝国主義間競争に備えて、自国資本主義強化を、金融寡頭制―工業資本強着横に求める日帝にとって、成田国際空港の年内開港は二重に急務であった。それは、

内外市場―交通の帝国主義的再編―国家統制であり、中小農民層を犠牲的基底部とした帝国主義農政―帝国主義相互分業体制の構築としてある。その軸は、同時一体的に貫徹される階級解体攻撃であり、行政的コントロールを背景とした公共事業の投下社会資本を垂鉛とした収奪の二重構造化として現象する。直接的には、小経営者、農民の細民化―階級の没落として、階級苦―階級の憤激の激成―反抗と階級の活性化を招来している。敵ブルジョアジーは、その本性に強制されて、増々広範に、増々重層的に、彼らの墓掘人を生み出している。彼らは、農村を統制経済下に置いた。彼らは、農業協同組合を通じて、農業生産物を収奪した。彼らは、土地を商品化し、そしてこれを収奪した。彼らは、農村プロレタリアートを公共土木事業に動員し、二重に搾取した。彼らは、一方で、農村プロレタリアートを都市最下層へとブルジョアにつつ、農村に、国家警察軍―職業反革命軍を導入した。つまり、彼らは、農村をファシズム支配し、階級闘争を持ち込んだのである。戦端は切り開かれた。彼らは、その暴力的結着を余儀なくされている。諸君！ 隊列を整えなければならぬ。より強固に団結しなければならぬ。その階級の力をして、

ア人民のものである。

敵を震憾せしめなければならない。部隊を組織せよ！ 武装せよ！ 報復せよ！ 殲滅せよ！ 諸君の戦果は、等しく、世界プロレタリア

☆ 今こそ赤色報復絶滅戦の嵐を！

☆ 職業反革命―政治警察を一人一人確実に殲滅せよ！

共産主義戦士はプロ独―戦争派に結集し、職業反革命―国家警察軍を攻囲殲滅せよ！

＝ 宣 伝 局 ＝

共産主義戦士諸君。諸君の任務は一個二重である。諸君はこの戦線の最先頭で、その革命的献身性と英雄性を賭して闘わなければならない。諸君は、その階級の規律性と、組織的系统性と、戦略的展望において、この運動の未来を代表しなければならない。諸君の階級の服務思想は、プロレタリア人民の利益の全体を代表しなければならない。「戦争」は、より雄弁に共産主義を語るものであり、その「軍隊」は、共産主義の母型である。諸君の任務は一個二重である。諸君は、この戦線において、国家権力の階級的性格を暴露し、帝国主義政策の反革命性を宣伝し、大衆の叛乱を煽動し、共産主義思想を外部注入しなければならない。そして諸君は、階級闘争―権力闘争を、共産主義政治革命を戦取しなければならない。「共産主義者の当面の目的は…すなわち、階級へのプロ階級の形成、ブルジョア支配の打倒、プロレタリア階級による政治的権力の獲得である」

(共産党宣言)権力闘争の今日的スタイルは「革命戦争」である。大衆的武装叛乱―蜂起の準備でもなければ、建軍―ソビエト運動でもない階級間戦争―革命戦争である。我々はすでに、職業革命家による密集した非公然の共産主義者党と軍隊を擁し、世界ブルジョアジーに宣戦を布告した。我々は「革命戦争下」にある。職業反革命―国家警察軍を一人一人確実に殲滅する事は、階級軍隊としての任務である。彼らが、ブルジョア階級の政治委員会―国家警察の暴力装置であるように、我々も又、プロレタリア階級の政治委員会―共産主義軍隊である。「軍事」は、別の手段でもって政治の延長である。諸君は、この戦線を整備し、共産主義者のグループからなる非公然統一司令部を設置し、部隊を編成し、配置し、戦略的統一性と、戦術的計画性と、組織的系统性を維持しなければならない。諸君は、この陣型の下に、革命的労働者・農民と結合し、この陣型

をプロ独政治の舞台として、革命戦争下、より強固に団結し、階級的規律を守り、共産主義を実現しなければならぬ。

旧「戦闘団」主義脱盟グループの革命的復盟を喜び、苦悩の教訓を共産主義運動の飛躍の糧とせよ！

II 中央組織局会議における中央組織局長談話 II

「我々はひとつの歴史的時代の中で生きようとする時、決して自らの存在を過信してはならない。そしてまた、自己自身を刹那に追い込んでおかない。その存在は社会的諸関係の、しかもその特定の時代の諸関係に規定されている、ただそれだけのものではないのである。」

確かに大きな変動の時期が来ている。権力それ自体の存在性を問いかけるような、権力を巡る闘いの時代が訪れている。それは、なるほど革命的激動の時代であり、我々からすれば革命戦争の闘いの時であるのかもしれない。ただその事を、その時代を担いようの主体とその主体を形成しようの根拠をぬきにして、もし単なる煽動一般のために語らねばならぬのだとしたら、それは將に時代そのものを抱えきれないという事ではないのか。

諸党派の機関紙には相も変わらず、もはやあと数日で帝国主義ブルジョアジーが危機の苦しさのあまり自然消滅してしまうかのような情況分析が並び、あるいは逆にプロレタリアート人民がこれ以上の苦しさに耐えきれず生きてゆけぬようになっていくとの悲劇性一色が世界を覆っているかのような階級指定がはしり、さらびやかで過激なアジテーションを裏付ける材料として、まるでスポーン新聞の華やかさのように競う語句が氾濫している。

だがそれらを述べている本人自身が、帝国主義ブルジョアジーは決してそのような自らの滅亡を甘受する程ヒューマンな強さを持つものでもなく、プロレタリアート人民に彼ら自身の生存を否定せざるを得ないような悲劇性を収奪を、帝国主義ブルジョアジーが展開せざるを得ない程弱い権力ではないという事を、じゅうじゅう承知のはずである。

危機の時代とは、しかり上層にとつての危機であり、そして下層にとつての危機の時代であり、しかも時代を変えんとする者にとつても危機の時代なのである。

激動期にあつて今日までその時代にうちかかってきた者は、この自らの限界危機を自覚し、しかもあきらめずにその時代を越えようの思想と主体をつくり得た者のみが残ってきた、という事を幾度となく証明してきている。

時代が今日であっても、それはまったく変らぬ真理として、我々の前に存在しているといえよう。

言葉のみに己れの限界を合理化してゆく者は、その言葉の重みによって滅ぼされてゆくであろう事を、一体今日の幾人が気付いているのであろうか。

革命戦争を闘い、そしてそれに勝利をしてゆく主体の建設など、言葉では簡単でもそれ程規定通りに事が進む筈はない。それこそその過程自体が階級闘争の徹底実践としての、闘いの中での建設でしかない。

その主体建設の進め方は、何かしらあるべき道筋があるというものではなく、それぞれがそれぞれの闘いと経験を豊富化する事で普遍化してゆくものであろう。発展のあり方は多種多様である。

それはただ一言のスローガンや路線でくくられてしまうといったものではないのだ、という事を知っておかねばならない。

その意味で我々の中にある、たとえば建軍についての、ある一面的な一路線的な取り組み方についての思考方法を、充分検討しつつ事を運ばねばならないだろう。あるひとつの成功例を、あたかも普遍的原理のようにもちあげてしまいうやうな、それは後の後く部分に大きな誤解を生んでしまうのではないだろうか。

革命の発展過程は多様であり、全ゆる可能性がそこには秘めらるであらうし、そしてそれは組織建設—軍建設—党建設にも同じようであつてはめる事ができると思う。

その発展の核心が共産主義運動としての自己達成の道であり、共産主義権力の拡大とプロレタリア独裁をうち立てる基本方針から規定されるのである限り、その核心をふまえる限り全ゆる発展の可能性が存在するのであろう。それは大衆闘争の発展過程にも連関する多様性であり、決してそうであるからといってそれを自然発生性として切り捨てては、目的意識性さえも流し去る事に通じてしまうものである。

特定のひとつの戦術パターンに革命を固定化してしまう事もできないし、組織建設を時期や力量の問題を抜きに語ってしまう事もできない。何かあるべきスタイルをかたく守ってきた事に自分の誇りを持ってしまっている人々、その誇りを決して路線のそれとしてしまつてはいけないのだという事を知っておかねばならないだろう。こういう事を述べると、何かしら大衆運動主義者の発想であるとか、あるいは共産主義の原則がないとか、その柔軟さをもって敗北主義であるとかの批判が内外から出される気もするが、しかし革命や党建設がそれ程型通りには進まないという事をかみしめながら自らの道を闘い抜くという事は、ただ単に人民主義者の大衆運動や、経済主義者の労働運動や、あるいは合法主義者の改良運動や、のみ柔軟さが存在しているという今日の状況を、逆に革命戦争を闘い抜き、革命軍—赤軍の兵士としての闘いを続けている我々こそが、その柔軟性を本當の幅広さとして有しうるのであるという客観的根

拠を指し示す事を通じて、真の柔軟さを奪還する意味において重要だと思ふ。

その意味で、今回再び党に自己批判的総括のうえで再結集し、新たな党の一翼を担うと共に、中央軍としてその戦闘を開始せんとしていて、かつての脱盟グループの復盟に対して我々は我々自身の総括を党的に整理しきつてきた事も含めて、我々の大きな教訓とせねばならない。

党の中にあつて彼らを徹底的に批判した者も擁護をし続けた者も、等しくこの我々の数年間の苦闘の中で最大の闘いであつた党内闘争の歴史的終えんを、我々自身の冷静さをもつて受け止めねばと思う。

我々が急進主義の傾向をぬぐいさる事ができるからといって批判されるのを何らためらつてはならない。我々にとつて、あの五九年から六〇年の急進性こそ全ての日本国民を政治化させ、そして支配層をして自衛隊自衛隊—治安戒厳令の準備をなさしめた偉大な急進主義であつたわけで、しよせん日共からの独自化と新たな道を模索するに大衆闘争の昂揚以外に求めるものはなかつたし、また自身を大衆そのものであると規定する事で、闘いそのもののダイナミズムにかのスターリンの残映の払拭をかけたとした事、これらの事は、後にプロ通派や戦旗派として自己解体していった諸君の、党的立場の欠落をしかつて最後の否としか言えないものはない総括であつたと思ふ。

ブントが急進主義の汚名を常に着る事ができたのは、それはやはりブントの最大の意味であつたと思ふし、その事に耐え得る部分は、かつての清水君や北小路君のように、党イデオロギー主義として自己解体の後、階級闘争とは一貫して無縁であつた革共同に行かざるを得なかつたように、また六〇年代後半で生命を終えた第二次ブントの多くの諸君が、党の内実を結局つかみ得ぬまま結果として最も形態的には党の組織をとらえている毛沢東主義にスターリニストとして屈服していった事を思い合せると、いったん自己がブントの急進性を捨て去つてしまつた時、その自己は、果てしのない観念主義と

しての党へと昇天してしまうのではないか、党建設というものが荒々しい階級暴力と大衆闘争、その自然発生性に立ちむかう目的意識性のダイナミズムの中でこそ生命を持つのだという事を理解し得ない時、その観念主義的党建設とは大衆にとつての何の益ももたらすものではないのではないか、どうしてもそう思われてしかたがないのである。

我々の内部でもこの傾向はあったし、今もあるかもしれないし、我々はこの傾向の克服にこそこの七八年ブントである事を拒否する思想が第一の課題を置いて良いのではないかと思う。

先頃、資料として第二次ブント系の諸君の現在の文章をいろいろと見る機会があった。

それらを手を取ってまず最初の感想は、なにはともあれ読むに耐え得ぬものばかりだという事である。もとより我々も含めこの間の理論的作業については、時代に対するはなはだしい遅れがある事は拭えないが、それでもひどすぎるのである。これらはもはやブントとは何の関係もないのである。いやしくもブントの思想を受け継ぐとは何の關係もないならば、スターリン万才であるとか、反スター反革命であるとか、反スタトロツキスト紛争であるとかの方向がうかがえるような主張をなす事などできる筈もないと思うのである。この間獄中で異なった地平から理論作業を続けている千葉正健君が、一部の限られた部分に配布をしている『連絡事項(1)』というパンフを他のブント系の資料と共に読んだ。三、四年前、千葉君が我々と同じ地平であるという事で、はなはだしい批判をいろいろと受けて来たという事も聞いた。党内の若い諸君の中に、太田竜氏に対する一定の批判と同列の千葉君への批判もあるそうだが、しかし千葉君のパンフを読む限り、彼はまぎれもないブントであるし、かつて我々ブントが必死で守り抜かんとした思想的原点は、長期にわたる獄中生活の中でも堅持し続けていると思われる。その彼が、今日のブント系に対する先に述べたと同じある一種のあきらめと驚きを、しきりとパンフの中で表明している。無理からぬ事だと

思う。同世代の者として、彼の怒りにも似た気持ちというのは充分すぎる程判るのである。その彼に一番批判的なのが、かのプロカクの塩見君らしい。

ブント系のみじめな腐敗過程で最も典型的なのがプロカクの塩見君であり、情況派(今は遊撃派と言うらしいのだが)の斉藤君であるように我々には思える。もとよりこの評価は、しきりと塩見君なんか論理展開しているような、ヒステリックな全否定としての論敵の批判ではない。ブントには、今ブント系で行なわれているような、あまりに無残な論争の進め方などはまず無かったという事、この論争の徹底し、批判の言葉の出し方、あるいはその論争のルールそれ自体の徹底した解体にこそ、ブントの一貫した伝統をぬぐい去っている今日のブント系の諸君の第一の問題がある。別に年寄りくさい言い方をするわけではないが、かつてのブントにはそんなやり方はなかったし、今でも鮮明に思い出す六〇年来から六一年にかけてのブント党内闘争と分派解体にあつても、表面的批判は別として、しかしそれぞれ互いの認めあいの気持ちは行動の端々に出ているのである。

それはともかくとして、塩見君や斉藤君を直接知っているわけではないが、三派全学連での斉藤君の活躍や、赤軍派結成に至る塩見君の理論的営為に、残念ながらはなはだ無關係でしかなかった立場からして、当時より多大の期待と注視を持っていたのはまぎれもない事実である。ブントというものは、革共同のような直接に人的流れがないと流れないものではなく、たとえ人は変わったとしても、その思想的基盤は様々な形で受け継がれ、しかも時に応じて浮上してゆくものだと思ってきた立場からして、確かに第一次ブントとは直接は關係性を持たない彼らにしても、しかし大きな希望を持ち続けてきたわけである。

とりわけ塩見君に関しては、六九年以降、第二次ブントの戦略の本質である世界同時革命と赤軍建設、そして組織された暴力革命という路線を大胆に実践させ、七二年連合赤軍敗北までの数年間の赤軍派の闘いを指導してきた、その大いなる苦闘に対する実践的評価

は、今も何ら低くなる事はない。だが、塩見君に対する最初の疑問は、連合赤軍が闘い続けていた七一年時での獄中からの様々なアピールの、ジグザグな、まるで気分的な論法であり、そして最大の失望は、『論議』の後半段階での連合赤軍総括と称する、まったく指導者としての自己の責任を抜きに、しかも現実には闘争を闘っているその状況下での判断とはまるでかけ離れた、あまりに客観的すぎるその展開、そしてやはりこじつけとしか思えぬ、十二名の立場がプロレタリア革命主義であり他の全てがただ殺されたというだけで(つまりは殺した側という事らしい。しかし先に殺した者が殺されているわけだが、これは果してどうなるのか)小ブル主義であつたとか、急進主義が反動主義に転化したのだとか言う事に対しての、あまりのデタラメさに対する失望であつたと思う。

そしてそれ以降の塩見君の急転回はひどいものだという気がする。中国革命を評価し、文化大革命を支持するものも判る。毛沢東という革命家・共産主義者を偉大だと認めるのもまったく正しい。しかし、かと言って、その方向を中国での動向とまったく同じレヴェル・同じ言葉で真似をしてゆくのはどういう事か。他の古くからの中国派の諸君でさえ、中国共産党に対する一定の態度を持って、事態を日本での闘いから規定しようとする時に、中国が右を批判すればそれと同じスローガンを出し、左と言えは左という。先日鄧小平を批判し、その傾向の組織内からの放逐を誇らしげに語ったかと思ふと、すぐさま今度は「四人組批判」のキャベンションをやる。塩見君は獄中で「毛沢東思想万才」を唱和していると聞く。まあそれはそれで獄中での自己を保つひとつの観念的方法で良いとしても、しかし個人の信条と組織の路線とは別次元のものではないのか。

とにかくこの種の傾向が、今日ブント系と自称する部分の中から登場している事に、まったくの無念の思いがするし、あらためて第二次ブントとは一体何であつたのかを、第二次ブントの諸君自身に問いかねたい気もする。

この傾向の諸君が、その一貫した批判の矢面に、反スタトロツキズム・小ブル主義をあげ急進主義をあげている。

ここで、ブントが勝ち取ってきた反スターリン主義の輝やかさき地平と歴史的必然性を述べたり、あるいはスターリン主義が前資本主義国での革命に於いて国家資本主義を維持する政治イデオとして登場してくるとかの、理論的な展開をなす余裕はない。ただ、ブントが革共同と異なる地平で、それこそ将に余りの血みどろの現場で生きたイデオロギー路線として創り出したその支柱を、かくも一片のスローガンで葬ってはほしくないのである。階級闘争の総括というものは、そんなにも無責任に、評論家風なおしゃべりの如く出来る筈はないのである。それは、ひとつの階級の方針と自らの路線が提出しうるその事と同地平で、それに規定された総括というものが、おぼろげながら出せるにすぎない。決して総括から方針が出るというものではない。それこそ自らの党派性によって方針が出るれ総括が出るのである。それは、総括をなす者にとって、将に生命がけの闘いなのである。少なくともそれまでの闘いを全否定するのであれば、その指導者の責任を明らかにしたうえで、自らの急進主義の克服があるべきだと思う。あえて言えば、今の塩見君や斉藤君は、その本人達の総括が、主張されている通りなら、少なくとも現時点ではひとつの組織を指導するという事はできない筈である。それが指導者の総括というものではないだろうか。我々は少なくとも第一次ブント以来そうしてきたし、その中で本当に優秀な幾人かの革命家を失なってきた。それとも今のブント系と自称する部分には、ただそれだけの最低限の共産主義者としての節度もないのだろうか。

とにかく、我々是一片の急進主義批判や小ブル批判でもって、一人の闘ってきた革命家を抹殺してしまう事はできないし、誰もその権利を持ってはいないという事である。批判は鮮明でなければならぬ。しかもそれは自分自身にとつても、である。他者を批判する事を通じて自己をも批判してゆくのであり、その事を通じての止揚を勝ち取るのである。それが共産主義者の総括である。

党にあっては、その相互批判が深刻であればある程、その中で自己と対批判者との關係は重い。その論争が党と階級の運命を決め

るのである。個人的なきがりや諸関係や利害で、それはなされるべきではない。そしてその相互の路線を巡る対立が決定的である時も、最終的には大会の多数決に従わざるを得ないのであり、次の大会までのその決定に対する批判とそれを述べる権利を有し、再度の大会提出の権利をあわせて持ち、しかし党の行動に於いてはその決定に従い実行し貫徹するのである。これがレーニンの党運営論である。我々は、この時期、ある意味で大会等につき変則たるを得なかつた。それは理解してもらいたいと同時に、我々自身の弱さであると認めても良い。非公然の完全な体制で全国の代議員を集中させてるに充分ではないのである。その中で、先の「戦闘団主義」グループとの一時的分離があつた。大会が開けない以上、多数派に従うという、方針決定のさせない時、ある面での相互の論点の冷却証明期間である大会から大会の時期が置けない時、我々は相互が了解のうえで少数派が一時的に脱盟するというのは、考えうる最良の方法であつた。その歴史的评价は後に続く者にまかしたいと思う。

とにかく、今日、再び脱盟したグループが復盟を勝ち取つたので

東京地方委の再建を軸に「日韓—狭山—三里塚」大攻勢を勝ち取り、革命戦争派の全国学生戦線を飛躍拡大せよ！

東京都委員会

全国の戦友・兄弟諸君！

今秋期政治決戦は、すでに我々が幾度となく確認してきた通り、七〇年代後期の階級激突・政治攻防を「日韓—狭山—三里塚」を頂点として、全階級戦線総体にわたる一大決着を得んとする帝国主義の側からする、否応なしの武装決着・軍事決戦の形態として我々につきつけられている。

それは将に、プロレタリアート・人民の側に於ける態勢の未確立という、我々の側の今日的な「後退期」を正面から攻撃する事で、野合を通じてのそれへの追従という、いわば七〇年代型党派没落のスタイルが、この七〇年代後半にあって旧プロント系を先頭に四トロ・構改そして毛派という全諸雑派を包摂した経済主義・大衆運動主義への自己解体が、唯一変則的形態でこれを突破すんとする中核派・解放派を若干別として、将に先を争う形で進展しつつある。この帝国主義のファシズム攻撃とそれに屈服敗北する日和見主義・修正主義・急進主義の動揺、しかしその中で増々闘争領域とその戦闘性・徹底性を創出しつつある反帝大衆闘争の全領域での拡大。この今日の階級情勢そのものが、将にプロ独—共産主義革命を聞いて抜く政治的軍事的支柱—革命戦争派の大登場を、赤軍の軍事的組織の力に裏打ちされた公然たる広範性を持った反帝闘争機関としての革命武装勢力の一大反抗を大規模なる攻勢を階級的に要請しているのである。

反帝戦線—革命武装勢力の軍事的政治的攻勢を！ 革命戦争派公然隊の公然たる大衆的総動員を！ 今やこの声は全戦線に満ちている。

我が東京都委員会は、この要請されている階級の責務を、党建設の拡大的発展と反帝大衆闘争の軍事的再編という二重の闘いでもって東京—関東の地で果たさんとしている。

第一に、党の全関東地域における全面的な指導部としての東京地方委の圧倒的再建である。

第二に、指導戦線の武装化と軍事再編を通じての今秋決戦への大攻勢であり、とりわけ他地方委との全国結合での全国学生戦線の革命戦争派としての再編・登場である。

この闘いの「現場」こそ、日韓—狭山—三里塚の階級闘争の荒々しい激突の最前線そのものであり、その反帝闘争の烈火を通してのみ党建設と階級形成の二重の闘いは一体化されたものとして貫徹されるのである。

ある。

その総括が今党的に完全な形でできるとも思わない。それはただ今後の党自身の闘いが証明してゆくものだと思う。我々が確認しておきたいのは、相互の違いではなく一致点である。いま再び一体となつた我々は、我々の限界を充分確認しながら、おおらかに、しかし謙虚に階級闘争に参加し続けていきたいと決意をしている。

どうか、限界を一片の言葉で片づけるというスローガン主義ではなく、自らの困難性を確認し、それを実践の中で克服するという階級的立場を貫いてほしいと思う。

今回の脱盟グループ諸君の復盟にあつたので、全党を代表しての決意を、この訴えを最後のしめくりとして述べる事で、再び更なる革命戦争の勝利にむけて闘い抜かん事を確認したいと思う。

一挙的に撃破せんとする攻撃に他ならない。

日帝内にあって、革命武装勢力としての大衆的陣地の軍事化が完成しておらず、革命軍—赤軍が全面的な正面攻撃を展開するまでに成長しておらず、将にプロ独—戦争派が全戦線を政治的・軍事的に充分に牽引しきれないという、その軍事的力関係の優劣にこそ今日の日帝ブルジョアジーの「攻勢」の階級関係での要因が働いている。

社民・社排派の屈服はもとより、小ブル急進諸雑派の大衆闘争の

中央指示に基づき地方委を全関東軍事指令部として再建せよ！

統一された革命軍—赤軍と、それに呼応する独立戦闘団の間断なき持久的なゲリラ戦闘は、東京から地方へ、地方から東京へと、將に全国的な「持久戦争」状況を確実勝利戦として定着させつつある。非合法党によるこの赤軍—独立戦闘団への政治的軍事的指導は、武器の供与・訓練、兵站の共有、情報交換、そして共同軍事行動へと着実にその成果をあげつつある。地下戦線と地下軍事組織は、今や完全に敵権力の視界と想像を超えた地平で拡大されつつある。

この赤軍としての共同行動を通じて、我々は独立戦闘団の諸君から多大の教訓と経験を伝授されて来たし、また独立戦闘団の諸君も統一戦線の真の姿と党の本来の位置を確認する事ができたと思う。何よりも東京地区に於いては、首都中核での地下組織の存在様式という地下非公然スタイルを確実なものとする事によって、六〇年代以降の大衆運動主義的傾向の残存をキレイサッパリとぬぐい去る事ができたのである。

公然—非公然の「使いわけ」では決してない。非公然からしか、それだけのみが、真の有効なる公然—大衆闘争を指導しようという具体的経験を蓄積する事によって、首都における地下労働者細胞にしかすぎなかった我々は中央の指導のもとに全東京—関東をじゅうりんし得る一大武装勢力として発展する事ができたのである。

三里塚における戦闘と寿町における闘争は、我々が単なる首都圏政治部に留まる事を不可能とし、労働者秘密細胞を軸としての全東京—関東全域での政治指導部の建設を日程にのぼらせたのである。

軍事行動の独自の蓄積は、個々の現場にあってその武装闘争への大衆参加を必然化させ、とりわけ学生戦線の武装化を軸とした接近は統一戦線形態以上の政治結合を要求し、しかも学生戦線の武装化は、ゲリラ戦のそれまでのスタイルを変えさせ、武器・戦術・陣地の獨創性はもとより、その擬装カモフラージュから心理戦闘・情報

戦に至るまで、将に大衆の自発性の多様さを、我が部隊に流入させ得たのである。

ここにあって、我々は以前より確認し実践してきたのであるが、プロバガンダとしての「党派の自己顕示」を抹消・止揚する事によってのみ、真の軍事を行ないうるし、また大衆との密着なる結合が勝ち取られるのだという事を確認した。

この情勢の中で、戦取された武装陣型を党的陣地として建設する為には、我々は何よりも党の全関東指令部たる東京地方委の再建に着手するのである。

七四年末の破防法・爆取弾圧と、七五年期の「左」右の日和見主義との党内闘争によって、系統的な組織指導体制の解体を余儀なくされた地方委は、それ以降の苦闘二年間を、個別戦線と戦闘団化を中心とした数個の都県委レヴェルで闘い抜くしか可能たり得なかつた。しかし、その中で労働者細胞を軸として工作・闘争を系統的に党的工作として闘い抜いてきた事は、非合法党の大いなる定着を勝ち取って来たし、またその闘いこそが今日の東京における広範な武装勢力の拡大をもたらしたのである。

地方委の再建は、この困難な首都圏での闘いを継承発展させるものとして建設されねばならないし、同時にそれは、たとえ経過や形態として都県レヴェルの結合という形をとっていたとしても、中央集権主義として、戦線の拡大広範に適應される中央からの党建設なのであり、それは今日までの中央一地区という変則指導形態の党的止揚なのである。

地方委再建は次の党(軍)の政治的強化と、二つの戦線における飛躍の三重の高地を戦取するであろう。

第一に、非合法党の中央集権的建設の地域的中軸として、各地区の全機能を集中し、それを有効に政治指導として作動させつつ、地下革命組織の軍事的機能としては、中央軍サイドでの軍事結合と軍事行動とは別サイドの、より個別大衆闘争の進展と軍事情勢に見合った独自の軍事結合を個々の分散した戦闘団を創りうるであろうし、またその軍事行動の独自の展開をゲリラ戦術として、赤色飛躍

となるであろうし、そうであるが故にその任の重要性があるのである。

今秋期「日韓—狭山—三里塚」決戦の勝利の中で
革命武装勢力としての全国学生戦線の建設を戦取せよ！

我が反帝戦線部隊Ⅱ革命武装勢力の三里塚での連続的戦闘とそれに引き続く狭山闘争での大衆的遊撃戦の貫徹は、すでに今秋期決戦の大いなる銃火を切り開いている。

全国各地で工作・組織化そして闘争を指導してきた党細胞—党機関は、この一大反帝闘争の戦線の最前線に、様々な公然組織形態を持って、フラクション・サークルから組合、そして独自闘争形態をもつて雄々しく参戦し先頭に立ち、そしてその反帝闘争総体と個別反帝闘争機関を軍事的・政治的にきたえあげ、しかも、闘いの核心である政治闘争すなわちプロ独—共産主義革命の政治水路を党的指導として革命戦争戦略のもとに注ぎ込んでいる。

合法「赤軍」派プロカクの将に合法主義の証したる「赤軍旗」とヘルメット「赤軍」のあわれなる合法屈服日和見主義の「万年アジテーター」ばかりの、ただの一度も大衆闘争の中でさえ戦闘を闘い得ない弱々しき隊列という今や大衆の「あわれムント」ゴロクソ赤軍」という我々さえもが怒りをこらえるに困難な非誇中傷をあげるにたいけない姿に比して、今日、こと三里塚だけでなく、無数の戦線で「あいつは赤軍らしい・あれは赤軍の部隊だ」という恐怖と期待、そして尊敬をもって秘かに見つめられている、将に「幻の赤軍」とする我が部隊の、反帝大衆闘争に於いては、あくまでも反帝部隊としての闘争・登場は、今日確実に反帝闘争—反帝闘争部隊の軍事的政治的飛躍を創り出したつである。

我々はこの戦取した地帯を更に拡大し、反帝闘争部隊の革命戦争派による大衆闘争上にある公然たる全国的態勢を、今秋期三大決戦Ⅱ日韓—狭山—三里塚の闘いを通じて、まず革命的な学生戦線の

戦(赤色テロ)・破壊戦を軸とした戦争行動をもって、地域での大衆武装闘争と実力闘争を大きく背後から規定するであろう。

第二に、戦線に対する指導の第一として、首都圏—関東を貫く労働戦線の中で、プロ独—共産主義革命の政治闘争の意識性を、現実の闘争課題と戦術の中に注ぎ込み、他の経済主義—労働組合主義政治としてしか存在し得ない小ブル諸雑派(カクマル・四トロ)そして全労活)を政治的に解体しつつ(領導し)明確に今日の国家—排外主義の主流へと転化を開始した民間総評プロクを、確実なる「権力闘争」の標的として捕促し、社会排外主義(フアンズム)との全面的階級戦争として、帝国主義労働運動の排外主義暴力展開への「戦争」の持ち込みを全面化せねばならない。フアンズムかプロ独か、帝本国民人民か世界プロカの選択をプロレタリアート・人民につきつけるものとしての、社会フアンズム勢力との全面戦争は対帝国主義ブルジョアジーと同列のものとして展開されるであろう。

第三に、戦線指導の第二として、東京における革命的な学生戦線の革命戦争派としての公然たる登場を勝ち取り「世界革命戦争—帝国主義戦争勝利！」「革命武装勢力(反帝戦線)の飛躍をかけ反帝闘争に勝利せよ！」「全戦士は革命戦争の最前線に出撃せよ！」をスローガンに、反帝闘争—大衆闘争の最前線での軍事的政治的密集性をもって、公然たる「武装闘争」を大衆武装闘争の展開をもって確立し、赤軍のゲリラ戦と呼応結合し反帝闘争の現場での革命戦争を公然・非公然に大衆の創意・工夫を軸に勝ち取る事で帝本国内革命戦争の立体的戦闘を形成させねばならない。

この闘争は、今秋の日韓—狭山—三里塚闘争が重要な試金石となるであろうし、また個別闘争においては青町越冬闘争と首都圏闘争が、西の釜ヶ崎と結合されつつ、革命的な学生部隊の労働者との結合という大きな前進をつくり出すであろう。

そしてこの戦線は、将に全国的闘争の結合として、全国学生戦線を革命武装勢力の政治軍事方針をもって公然たる革命戦争派の登場として勝ち取るであろう。

東京地方委の再建はこの党拡大と反帝戦線の質的飛躍の最大の環

全国態勢として勝ち取らねばならない。
その公然たる反帝戦線の革命武装勢力としての公然—非公然たる闘争を、背後から地下的に政治闘争へと飛躍させる階級指導を、我が党—党機関—党細胞は将に「統一戦線」指導として貫徹しきり、しかも反帝戦線の一員としてその闘いを全力で領導し抜くであろう。反帝闘争自体の階級的任務は、今日の帝国主義の侵略反革命—差別分断支配攻撃が、フアンズム攻撃として全面化、しかも暴力的展開をもつてプロレタリアート・人民に襲いかかっているその階級情勢の中で、帝国主義の攻撃を、そのかけられている個々の現場で確実に打砕き、帝国主義の野望を、たとえ部分ではあれ阻止し、そしてその帝国主義との闘いを通じて形成される階級的隊列を、帝國主義の打倒—資本主義の廃絶へとむか「真の解決」の道、プロ独—共産主義革命へと飛躍させる事は決定的に重要である。

この反帝闘争に全ゆる階級階級をまきこみ、全人民的闘争としての広さと深さと、しかも多様さを勝ち取り、徹底して大衆に依拠し大衆路戦としての反帝闘争を、帝國主義に対する抵抗の大衆的陣地として、巨大な武装戦線として、全ゆる形態・組織そして戦術を駆使しうる、「自発的」闘争陣型として拡大させるのである。
その中軸に、今日までの反帝闘争の主要戦闘部隊であった学生戦線として階級戦線の最前列に登場させる必要がある。

一貫した急進主義運動の担い手であり、また、そうであるが故に六〇年代以降の単なる大衆運動陣地としての発展だけでなく、いやそれよりも将に日帝内に於ける日共に代わる真の共産主義党の建設の目的意識的闘いの主要部隊であり、アレントを典型的にその党建設の闘いにこそ全ての政治性としかもその苦闘—敗北が存在していたこの学生戦線(運動)を我々は学生戦線から党を建設するといってきた六〇年代急進主義—自然発生主義を止揚し、しかしとりわけアレント—中核派の有していた「大衆運動主義者としての積極面」を継承しながら、あくまでも大衆闘争—反帝闘争それ自体の拡充の為に、この反帝戦線主要部隊たる学生戦線を、将に革命的な全国部隊として単一

化する時期に突入しているのである。

我々都委は首都圏での、たとえ少数であっても、革命的サークル・フランクシオン活動をを通じて、学生闘争そのものの陣地を一定確立し、千葉から神奈川の全関東的体制を今確立せんとしている。その闘いは徹底した「現地実力闘争」の闘いの中でのみ貫徹されるであらうし、そしてその現地闘争の中でこそ、他地方学生戦線との強固

即自的階級形成論の自然発生性批判

—「関西赤軍」の統一戦線—戦線指導について—

はじめに

政治闘争すなわち権力闘争としての階級闘争の再編は、歴史的客観的法則を裏証するかの如く、今日の階級闘争の内部にあって、その否応なしの進展を加速度的に進めている。「権力を巡る闘い」は、いわゆる「権力問題」と称する世界分析から論評を加えるという、万治評論主義者達の機関誌上の「苦闘」から、現実の階級諸闘争を政治闘争へと揚棄し、得に資本主義の廃絶を実現する為の生きた階級実践を闘い抜くという、闘いとしての「権力闘争」へと自己をとまはなち、それが文字通りの革命であり、革命闘争そのものの事なのであるという事を、階級闘争それ自身の中で裏証しつつ、自然発生性にたとえ色濃くそまっていたとしても、その階級闘争の担い手たるプロレタリアート・人民に、その事を日々々の課題として増々確認させつつある。

七〇年初頭の権力闘争の、日本に於いての一定の敗北・停滞としての「連合赤軍」の敗北以降、膨大な敗北主義・日和見主義として登場したブント系・毛沢東派の「綱領論争」を「趣味」とする「党建設主義者」達が、この権力を巡る闘いを、単なる論評としての「権力問題」の解説へとおとしこめ、ひたすら、己れ自身の小ブル性を

な反帝闘争上の意思一致が勝ち取られるであらう。
反帝闘争の最前線に赤々とした「大衆武装闘争」と「大衆実力闘争」の実践を刻印し、その闘いの中で、公然たる革命戦争派の登場、革命的學生戦線を中軸とする反帝闘争部隊—革命武装勢力の進撃を勝ち取れ！

立証するかの如く、数十枚のあれやこれやの評論付きの、しかもあちこちの「綱領」からの借りものとしてのツギハギ性と、実証性のない空論主義の害毒をたれ流しながら、闘う大衆の求める十年後のビジョンも、ましてや二・三年間の展望も語る事ができず、ひたすら教条性と狂信性をのみ救いとして延命し続けてきた事に對して、この間の階級的動乱と情勢の急転向、しかも自然発生的な権力闘争への大衆サイドからの接近・実践は、彼らのこの数年間の「党建設」主義、「綱領主義」としての延命の実態が、つまるところ階級闘争の後退期における経済主義者・日和見主義者としての「人民迎合」自然発生性への溶解でしかなかった事を、彼ら自身の小ブル性、観念性を暴き出しつつ、階級闘争の大衆内部での彼らを取り越えての大衆昂揚と、そして彼らの党派自身の分解、混乱、野合という階級情勢として、もの見事に今日自ら立証しつつある。

権力問題を語る事と権力闘争を闘う事は、百里の道のりほど違いのある事を、今後の階級闘争の発展それ自身が、より一層鮮明にしていくであろう。

さて、この権力闘争の時代への突入と、権力闘争への武装闘争—軍事闘争をもってしての大衆闘争内部からの接近・参加という情勢の中で、様々な大衆戦線から生まれた「武装グループ」が独自のな

軍事闘争と組織の軍事地下組織化をもって、得に大衆闘争領域からの「自然発生的」な階級諸闘争の権力闘争化が計られつつある。しかし、この大衆闘争の自然発生的散化から軍事闘争に参加する部分の中に、権力闘争それ自身の指定、共産主義運動の位置の欠落、そして大きくは権力実体であるところの共産主義党—革命党の問題における未整理と誤謬が存在し、それ故、いわゆる「階級形成」の問題における大きな混乱が存在すると認めざるを得ない。

我々は権力闘争—軍事闘争を、全ゆる「大衆領域」に「真の階級闘争」として押し抜ける為、あえて、これらの諸グループのそれ自身の自然発生性を二・三点批判しておかなければならないと思う。その意味で、その若干の誤った傾向の我々自身の潮流内からの登場という事も含め「関西赤軍」の諸君への、この間長期にわたる論争と相互止揚の中で確認された「関西赤軍」批判という形を通じて、これらへの総体的批判と問題提起をおきたい。

関西の地において、ある意味で独自に、大衆闘争内部からの闘いを通じて「赤軍」に自らの武装闘争と軍事組織の建設をもってして結集を勝ち取ってきた「関西赤軍」の戦闘的・英雄的な同志・戦友達。彼らの苦闘は、ただその同志達が古くは六〇年安保ブント以降の戦士であり、またそれとはまったく逆の、未だ十代の戦士達も擁しているという、その組織の持久性・系統性への評価のみでなく、六〇年代後半の大衆闘争の自然発生的昂揚の敗北と、そして七〇年代前半の「連合赤軍」を頂点とする武装勢力—軍事組織の大敗北という、二重の敗北の後退を、得に独自の地下構造をもって、戦闘を展開しながら後退戦を闘い抜いてきた。この事は、今日、それぞれの戦士、あるいは組織の機関が一方で確実に大衆闘争を担い指導し、しかも地下組織としての系統性を大衆闘争の内部にまでも維持しているという事と同じく、まったく称讃以外の言葉を我々は知らない。

今回の「関西赤軍」の戦友達との真摯な徹底した論争を通じての整理、そして再度新たな党の一致を、逆にこの論争を通じて克ち取れた事は、日本における革命戦争—軍事活動の展開に對して飛躍的な量的質的拡大をもたらすであらうし、またその党的論争の内実は

日本における共産主義党の建設にとつて重要な一歩を印すであらう。独自の大衆闘争指導と、地下組織建設、これをもってしての「赤軍」としての戦争参加、そして我が党への参加。しかも、それ以降の党内闘争での、得に「武器」を持つ者のみが加えられる謙虚な態度と徹底した論戦。そして再度の、我が党関西地方委員会としての再編。今や「関西赤軍」は、党の誇りうるべきひとつの表現であり、我々の柱である。

この事を確認しながら、「関西赤軍」との各点における論争とその確認点—止揚の地平を、整理した形で提出してゆきたい。

第一章 「関西赤軍」に対する「批判者達」の敗北について

まず第一にここで、若干、「関西赤軍」に對する、我々の立場からのそれとは全く反対の立場からの、いわば「大衆運動主義的見地」つまりは民主主義派的傾向からの「興味ある批判」について、党の立場を明らかにしておきたい。

この数年來、とりわけ旧ブント系諸君の中であって、プロカクやM.L.派は別として、こと本来の「赤軍派」あるいは「赤軍系」に對する論評は「禁句」とされてきた感がある。それは、七四年以降のいわば日本革命戦争の第二次進展を共に闘ってきた「東アジア反日武装戦線」等を先頭にする「独立戦闘団」に對する巧妙な「迂回」と同列の対処であった。逆に、こと「赤軍派」に對する批判は、六九年以来の自己の「日和見主義」を自己合理化するかの如き勢いで、今や赤軍とは縁もゆかりもなく、ブントからも決定的に脱落した、社会愛国主義者・経済主義者であるプロカクに對する低次元での批判、罵倒、そして嘲笑という形で、赤軍派の全成果と全歴史を葬り去ろうとしてきたように思えるし、そしてそれはことプロカクに關する限りのを得ていた。

しかし、赤軍派あるいは赤軍に代表される、日本における革命武装勢力—革命戦争派を、すでに「赤軍派」を解消してしまつたM.L.派はもちろん、社会愛国主義・国家主義の一点でスターリニストとして昇天してしまつたプロカク等に對する逆方向からの批判でもつ

て事足りりとするのは、余りにも早計である。

「閩西赤軍」に対する、ようやくの「批判の自由」の再開も、これによると、この無残な末路を露呈しているプロカクやML派に対するそれ自身正当な「甘い見限り」を「閩西赤軍」に対して同地平で、おすおす出てきたのかもしれない。

だが残念な事にその批判は的を得なかったし、「閩西赤軍」が、もとより合法ヘルメット集団のプロカク―大衆運動主義者でもなかったし、そのおすおすとした批判は、他の未だ「考える余力」を残している旧プロント系残派の諸君が危惧したとおり、その批判をした者自身の見事なる「大衆運動主義」「合法主義」そして「党的立脚基盤の欠落」を、自ら明らかにするにすぎなかった。

批判の要点はようするに「閩西赤軍」の統一戦線提起の中で、日共・カクマルとも大衆運動上においては統一戦線の行動をとり得るという点に對してである。「あの日共と統一戦線を組むだてー！」批判者は素朴にこう驚嘆し反発する。そして、東大闘争や矢田差別裁判をもち出してきて日共の反革命性をいよいよ説明してくれる。

しかし問題は簡単である。我が党において今日まで日共やカクマル分子、いや自由主義者やクリスマンとも「統一戦線の共同闘争」を行なつて来たし、また今後もその闘いを増々拡大するし、しなければならぬと考えている。日共・カクマル分子を含め、いかなる階級・階層、そして「党派分子」とも。それが帝国主義に反対する限りの部分とは、反帝闘争の一点において共に闘いの中に組み込んでいくし、逆に全ゆる部分を反帝闘争に組み込もうとしている。

但し、問題の重要点はここにこそあるのだが、その共同闘争は、あくまでも「大衆運動上」での共同闘争であり、大衆の自然発生性の中で形成される「統一戦線」であり、下からのそれであり、民主主義的形態であり、つまりるところ、それは帝国主義的政策や、帝国主義策動に反対する限りのものであり、決して階級性や革命性や、まして社会主義―プロ独を、その形態からは生みもしない。いわゆる全人民的闘争のそれではなく、超階級的であるのと同時に没階級的なそれである。

次元のそれであり、この自然発生性は広く深く量的に大きければ大きい程有効なのであって、反帝闘争としての全人民的闘争の中で、將に帝国主義の結果に対する闘いの徹底性とその闘いの蓄積を持つては持つ程、党―共産主義への階級的止揚の基本的な自然発生的土壌を創り出してくれるであらう。

もちろん、それを止揚するだけである。もちろん、その大衆闘争を表層的には大衆の一員としてその内部で闘いながらである。

日共・カクマル分子やあるいはプロカク分子とも、この大衆闘争の中においては、反帝闘争の一点のもとに、「統一戦線の共同闘争」を「大衆」として結ぶのであり、党として結ぶのではないし、そんな事はありうるはずもない。党と大衆戦線の厳密な区別を、しよせん大衆運動主義的党派はできないが故に、大衆戦線のものであって、党派闘争を代行しようとしているのである。セクト系大衆戦線同志の「大衆の内ゲバ」として。

今日、党派のヘルメットをかぶれば「党派」となる「大衆」が、大衆意識の自然発生性によって創り出す「党派性」などというものは、大衆闘争の発展にとっては何の益もたらさず事もないし、ましてや「党」という存在形態とは縁もゆかりもないものである。ただただ、大衆運動的党派であり、つまりは単なる大衆である。

我々は、従つて今日の一切の「党派」を「党派」として認めないし、ましてやあるべき「共産主義党」であるとも断じて規定しない。それらはすべて大衆である。日共、カクマルからプロカクまで、すべてが大衆であり、大衆でしかないのである。

大衆の個々の有する「党派性」として表われる各イデオロギーを、自然発生性の止揚とブルジョアイデオロギーの粉砕という一点でもって対処するのであり、自然発生的「党派」として表われるか、サークルイデオロギーや個人的傾向として表われるかの違いはあったとしても、それらはいかなるイデオロギーの粉飾をこらしていても、結局のところ大衆内部でのそれにすぎず、つまるところブ

その大衆闘争上における一致点のもとの戦線は反帝統一戦線として、徹底して広範であり雑多であり、そしてそうであるが故に、「大衆戦線に派遣された黨員であるその戦線内の一大衆活動家」は、党そのものとして、他の種々の民主主義派、改良主義、あるいは経済主義、すなわち総じてのブルジョアイデオロギーとの徹底した「党派闘争」を闘い抜く場である。大衆闘争は、その大衆闘争の進路とその指導を巡つて、各イデオロギーと党派性が將に「党派闘争」として、大衆のそれぞれを通じて闘われる場所である。

ただし今日までのこの「大衆闘争内部」の党派闘争が、直接的な党派による党派の大衆運動の確立という方向をもってしか闘われず、大衆運動と党との連関がまったく曖昧にされ、党と大衆運動が同列となり、結局は党派の大衆運動(各セクト系戦線)という形でしか建設されず、それは、將に党派的大衆運動である事での大衆運動的党派でしか、つまり、自然発生的な民主主義派としての党派でしかなかった事を、合法主義・公然スタイルでもって、その党派自体が証明するに留まってきた。

我々は、真の権力を有する党であり、共産主義権力であり、そうであるが故に中央集権の非合法党である。

党が大衆運動に対する立脚点は、自然発生性の止揚、すなわち即自的プロレタリアートの共産主義者への止揚であり、政治闘争Ⅱ共産主義革命への整列化である。

目に見える形での「党」は、たとえいかなる戦線的・革命的な闘いを展開している戦線―陣型であろうとも「存在」しない。ただ存在するのは、その戦線―大衆運動の中にあつては、唯一、その戦線の最も英雄的・戦線的な「戦士」であり「労働者活動家」にしかすぎない。表面の形態では、黨員はこの形態以外の如何なる形態をも有していない。

従つて一切の結論はこの事によって規定される。

大衆闘争内部の大衆自身によって創り出される「統一戦線の共同闘争」はあくまでも、大衆の自然発生性によって生み出されるものであり、それは党によって形成される「統一戦線」とはまったく別

ルジョアイデオロギーそのものなのである。

今日の「党派」諸君のこの現状こそが、大衆運動上の党派でしかないというこの事が、逆に大衆運動の自然発生性という点で、共産主義の側からする大衆運動の止揚、そして指導という点で、大衆運動に対する党の配置―細胞指の系統性を通じて、大衆運動上のそれとして、將におおらかに、大胆に、共同の闘争、すなわち、帝国主義に反対する限りの統一戦線を、大衆として結成する事ができるその根拠である。

いかなる「大衆」であらうとも、それが、自由主義者・人道主義者や、あるいは日共・カクマルとしてプロカクであらうとも、その「大衆」に対して党は大衆闘争内部では大胆に「一大衆」として結合し、その大衆闘争自身の政治闘争Ⅱ共産主義革命にむけた止揚の目的意識的闘争を通じて、指導の中で解体してゆくのである。もちろんその指導に物理力が入るのを我々は決してためらう事はない。大衆的闘争としてのそれは大いにありうる事である。

党は、それら全ての「大衆」に対しては、まったくその「外部」にあつて、將に即自的プロレタリアートに対する共産主義権力として自己を登場させる以外の接合の形態はない。

党と大衆とは決してその階級性において混同されてはならないし、混同するはずもない。

以上が、我々の統一戦線問題に対する基本的立場であり、また「閩西赤軍」の現在における基本的態度である。

「閩西赤軍」において、この統一戦線論が結果において下からの自然発生性―即自性に大きく規定されたという限界性を有していたとしても、しかし、他方でこの統一戦線の中における党と大衆の關係は明確に整理されていたのである。

統一戦線を「三種」として安易に下からの形態分化をしてしまひ、人民戦線と反帝戦線という、それ自身反帝闘争の範囲内のそれではない戦線を、現実の問題として確かに一方で、たとえばある組合にあつては民同との対決を日共と連合してやらねばならず、他方、政策阻止闘争である日韓や狭山、そして三里塚にあつては明確に日

共・カクマルと分離した戦線が要求されるという自然発生の要求の中で、かつての「反安保国民会議」とそれ以降の「反戦青年委」の区別とでもいうべき組織的形態をもって、その大衆闘争の現場における戦線を「わかりやすく」しようとしたのは充分理解できる。しかし、それこそ、自然発生の性としての反帝闘争に何らかの意味付けをするという旧来の「新左翼」の悪しき傾向であり、たとえば日共と中核派が形態において異なる事は事実でも、その「党派」としての土壌がやはり「民主主義派」のそれではないというイデオロギー的な明確なる位置付けをこぞ曖昧にする事に通じているのである。

それは将に「旧左翼」と「新左翼」の差が、その「急進性」一般でしかない事を明確にし得ず、すなわち、今回「関西赤軍」への批判者として登場して来た「我々と日共を一掃にしないでくれ」という、大衆運動上の民主主義「党派」と同じレヴェルに陥ってしまったのである。

この方向での「関西赤軍」の限界は存在しているも、しかし、それは「批判者達」のそれとはまったく逆の限界であり、彼らが自己を真の中央集権主義・非合法党として、つまり共産主義権力として確立していない、日共やカクマルと同次元で対決せざるを得ない大衆運動主義者として、党と大衆戦線を混同し、結局は党を大衆戦線に解体してしまう、自然発生の民主主義派でしかなかった事を彼ら自身を示させたにすぎず、その非合法党としての大衆戦線への連関の問題においての「関西赤軍」の諸君の圧倒的な正しさを逆に分らかにさせたと言えるのである。

第二章 地下革命組織の基本政策に対する大衆運動的理解の誤謬とその組織的表現

共産主義党のブルジョア体制下における必然的存在形態は非合法党としての存在であり、それは権力陣型の・路線的には中央集権主義であり、かつ組織実体的には地下党であり、それらは党存在をそれ自身をもってして唯一二重権力実体である事の異なった表現である。

への水路を不可避的課題として掲げている事、この事に規定されていけば資本主義体制への闘いが「周辺部」における持久的勝利と「中心部」における圧倒的敗北という階級闘争の現局面は、第三世界、つまりは世界資本主義の基底部分における世界的総叛乱と資本主義の植民地支配としてある世界体制をその矛盾の底辺の將に現場で、反帝反植民地解放「革命」として資本主義そのものも揚棄するひとつの物質的土台を造り出したという、この「周辺」での「叛乱」と「革命」の勝利を、「中心」の敗北的な、それ故国家主義・排外主義に身をゆだねざるを得ない「本国」人民が、自己を階級的に止揚し、「周辺」での「叛乱」と「革命」を「本国」に逆流させ、しかもその資本主義最終段階としての膨大な生産諸関係を社会主義的物質的基盤として（それは将に世界的なそれであるが）プロレタリアヘゲモニーのもとに奪還しようのか、この将にすぐれて国際的な階級任務が帝国主義本国プロレタリアート・人民をして課せているのである。

そしてその世界的階級関係に規定される帝国主義本国内階級闘争の必然的発生とその進展は、将に国際階級闘争の今日的闘争表現たる「本来の姿」、すなわち階級闘争であり革命闘争であり、革命の暴力的展開として権力を巡る闘争があるという、その必然的闘争形態を、帝国主義本国にも様々な形態をもってして逆流させざるを得ず、またそれらへの大衆闘争そのものの独自の接近が存在するのである。

これはいれれば歴史的な「武装した革命」の形成してきた「武装」に対する二重構造の表現でもある。

「武装」に対しては、今日までいかなる革命であつてもその二重性、つまりは指導的前衛II党の武装と全人民の総武装II大衆武装というものが同時一体のものとして展開されてきたし、それは目的意識的軍事と自然発生の武装という、階級闘争の本来の形態に深く根ざしている。

赤軍とそれに呼応する大衆的武装勢力、この二重構造は絶対的な歴史の不可避的形態であり、その両者の結合こそ一切のカギである。党の武装表現として革命軍II赤軍を建設発展させる事と、階級形成の武装物質的表現としての革命軍への参加を媒介にする人民武装の

従って決して非合法党としての党存在の位置は、あたかも「非合法闘争」を戦術的に闘うという戦術領域から党が「非合法」になつてゆくという、戦術主義的な物理的形態でもつてその党の存在形態が規定されるという事は決してない。

ブルジョア権力に対する共産主義権力の存在という二重権力であり、一方は近代主義の遺産を喰いつぶしてゆく、没落する「過去の権力」であり、他方は人間の類的存在の全面開花としてある最終社会の共産主義社会へ向う「未来の権力」という事であり、その対峙する今日の二重権力の存在様式が、ブルジョア体制に対する「非合法」性の位置の必然性なのである。

従つて組織形態での「地下性」も、この共産主義運動と共産主義権力の基本路線から指定されるわけで、それは決して戦術における「技術主義」と対置されるいわゆる「陰謀主義」とはまったく何のゆかりもないものである。共産主義運動の目的意識性と、その権力としての執行性、そしてそれが過渡期に生み出すプロレタリアート独裁（権力）、その戦略的方向によって逆規定される今日においてのそれへの唯一の保障実体であり存在形態としての「中央集権主義」の「上からの目的意識性」であり「非合法党」の「今日的な共産主義権力の存在による二重権力」である。

大衆闘争の戦術的展開の中で自己を打ち鍛えてきた「関西赤軍」にとつて、この組織問題における「党的」理解が未だ不明瞭であつたと言わなければならない。組織を日常的活動・闘争の必要性一般のみから規定するという、ブントの「組織的伝統」をひきずる形で組織再編と地下組織建設を展開するという方向にならざるを得なかったのである。

しかし、この大衆闘争それ自身から軍事的諸活動の問題が登場してきている事は、今日の帝国主義本国階級闘争にとつて、世界性から規定されざるを得ない本国プロレタリアート・人民の必然的選択の結果として、階級闘争の歴史の必然性を有している。国際階級闘争が国際帝国主義としてある世界資本主義体制そのものに対する、一元的な反帝闘争であり、かつその階級的基盤による世界社会主義

確立である。

もとより革命軍II赤軍は世界赤軍であり、各国各戦線の革命軍を統一化するものであり、世界革命戦争をそれぞれの戦線で担う単一化されたものであり、また世界社会主義へ向けて世界プロレタリア軍隊として、世界革命戦争を担うという一点で結合し建設されたあり、革命戦争統一戦線II革命戦線である事を政治表現とするものであり、革命戦線軍II赤軍として、もちろん党II共産主義党そのものとは決して同一ではなく、党の中央軍を通じて赤軍への党指導は貫徹される。

帝国主義本国階級闘争の武装闘争化という客観的歴史法則に導かれ、独自の武装化を開始した大衆戦線として「関西赤軍」が、その武装化の問題を、正しく「武装闘争を通じて武装化」つまりは「戦争」下における「戦争態勢の構築」として確認し、実践し、勝利を上げて来た事を、断じて評価せねばならない。たとえその武装闘争の結果表現が特殊な形態と変則的戦果を現在にあって表現せざるを得ないにしても、いかなる形ではあれ武装闘争そのものを自らの組織的再編・軍事組織化の実践環として展開してきた事は、まったく正しい。

他の「革命戦争と蜂起」を呼び続けてきただけの「党派」に比してその「関西赤軍」の位置は圧倒的である。

ただ問題は、その武装闘争の戦略的位置と、そこから規定される「政治戦術」II組織工作の内実が、はなはだ「大衆の希求」一般の地平に留まってしまつてきたという事である。

地下革命組織の組織員の公然たる部署での政治活動、大衆闘争の指導・展開とその組織形態が、やはり大衆闘争そのものを、目に見える「政治課題」への直接的闘争としてののみ宣伝・煽動をし、その組織形態をストリートな大衆陣地にしてみたい、一方での自らの武装闘争をまったく分離させ、自己の大衆闘争とは何の連関をも持たせざる事ができず、組織的にもその武装組織と大衆組織を分化してゆくという、つまりは大衆闘争の自然発生の性「軍事」を接木しよう

としながら、しかし接木さえもできずにその両者が系統化されず時として運動上で対立さえ発生させるといふ、決定的矛盾を生じさせてきたのである。

「閩西赤軍」の諸君のこの矛盾に対する、ある意味での解決として「整理」された「統一戦線論」は、しかし結局は何の解決にもならずその自然発生性の一般的な再編に留まらざるを得ないのである。

大衆闘争の自立化一般からは決して「軍事」の持久性の問題は出て来ない。大衆闘争を政治闘争に共産主義革命の立場から組織するという、その事においてのみ、すなわち大衆闘争を権力闘争—政治闘争に向けて止揚する為の暴露・宣伝・煽動を通じて、大衆闘争を非自体的政治的・軍事的確立を造り出す事であり、それは公然闘争・非公然闘争あるいは改良闘争・革命闘争として平和的闘争・武装闘争という、表現される形態の差ではなく、その両者そのものを時期に応じて戦術的組織的に採用しながら、しかし基本はプロ独へ向けた革命闘争としての革命闘争であるという事を、大衆闘争それ自体に自らの闘争展開を通じて、共産主義の側から粘り強く指導し抜く事であり、その実践者として鍛える事である。

従って大衆組織それ自身の公然組織形態と非公然組織形態は同時一体の二重形態を有するわけであり、そしてそれは他方で党の細胞指導を通じて三重構造とも四重構造ともなるのである。単に武装闘争という戦術のみで戦略的位置を創り出したり組織的位置付けをなすという事によつては、大衆闘争それ自身の自然発生性を止揚した事にはならないのである。問題は共産主義革命からどう規定されるのかという事が全てである。

第三章 階級協調路線と階級解体攻撃の連関の未整理からみる表層的ファシズム分析への没入

組織論・戦術論における自然発生性から来る誤謬は、それ以前の任務を規定する現状分析・帝国主義分析の誤りに大きく位置付けられている。

「閩西赤軍」は今日のファシズム情勢を、国独資体制における巨

を計ろうとする現代修正主義・日和見主義の社会民主主義派・社会排外主義(ファシズム)派を擁護する事にも通じるのであり、「民主連合」派の決定的な反革命性・犯罪性を美化してしまうのである。それはとりも直さず、かつての構造改革主義者達の提出した「資本主義の民主的改良」という資本主義体制の維持そのもののイデオロギーへと、すなわちブルジョアイデオロギーそのものの自己解体を意味するし、そこからは決してプロレタリアートの階級的任務も出てこなければ、共産主義と共産主義運動の必然性は見事に捨棄されてしまうのである。

「閩西赤軍」が「階級協調路線」を正しくブルジョアジーからする「攻撃」であると規定しているのはまったく正当であるにもかかわらず、「協調」があるがままの階級性をもってしてのそれであるとしてしまう傾向は、より階級支配の高度化という動向を把えきれない。今日のブルジョアジー・帝国主義にとつては、レーニンの言う「あるがままの自然発生的な即自的プロレタリアート意識、すなわち労働組合主義的意識」それ自身も、危機の時代にあつては容認し得ないものであり、逆にそのプロレタリアートの即自性をブルジョアジーの側からして、国家主義・排外主義、総じての事大主義と私的エゴイズムという、より目的意識化したブルジョアイデオロギーへと「向自化」させねばならないという事なのである。

ここにこそ「戦後民主主義」と異なる地平での「民主主義」、すなわち「ファシズム民主主義」の存在形態があり、一方で表層的には「戦後民主主義」が崩壊しての「ファシズム」なのでなく、「戦後民主主義」の平面的延長にこそ「民主主義ファシズム」の確立があるのであり、そうであるが故に、「戦後民主主義」勢力である今日の社会党・日共が、社会民主主義派・社会排外主義派の本質として、この「ファシズム支配」構造の中へと自己を安住させ、階級支配に反革命の一翼を担い得るといふ歴史的必然性を生じせしめるのである。

今日のこの「ファシズム化」は世界資本主義の第二戦線たる日帝・E.C帝という、米帝に対する一方での従属構造と他方での独自プ

大独占の集中の高度化と行政官僚による統制化、そして帝国主義労働運動の育成強化、その構造下での政治形態での独裁体制の自民党保守本流によるむきだしの支配構造ではなく、「中道右派」連合とい

う「民主主義統合」にその政治支配の軸を移すと主張する。そして、いわば「平和と民主主義」の一国の完備を標榜しつつ国家主義・排外主義の一点で、市民社会から国家までの基本的維持の統合イデオロギーを開花させ、内における「国民融合」—融和主義すなわち翼賛化体制と、外における侵略体制・植民地支配体制の強化へと集約されると、今日を位置付ける。従つて今日の帝国主義の国内支配の

攻勢は反革命統合を軸とする「階級協調路線」であるとする。階級支配構造が国家主義・排外主義統合へと向かうという事、そしてその政治構造が民主主義連合であるという事、従つていわゆる「階級協調」の時代へと支配構造が移行せざるを得ない事を、我々は認めるにやぶさかではない。

ある意味で「閩西赤軍」の分析のその内容規定・概念規定は何ら誤っているところはないのである。

しかし、表層的に表現される「階級協調」は決して今日のあるがままの諸階級・諸階層の統合協調では決していないのであつて、その「階級協調」とは将に「没階級の協調」であり、ブルジョアジーの階級統治の階級としての維持確立を前提としての他階級・階層の意識的無意識的解体の結果の「協調」なのであつて、とりわけプロレタリアートにとつては何よりも「階級解体」という階級性の敗北を絶対前提にする以外の何ものでもない。

「階級協調」がブルジョアジーの主要な支配構造の目標ではなく、その前提としての、プロレタリアートを軸とする階級性の解体喪失にこそ、この「階級協調路線」の本質があるのであり、それは将に「階級解体攻撃」といふ、いわばブルジョアジーの側からする積極

政治統合の環を「階級協調」であると、すんなり表現してしまう事は、支配の基本構造である「階級解体」といふブルジョアジーの攻撃を曖昧にしてしまうのであり、「階級協調」へと自己の政治延命

ののは、決して偶然ではない。

自己資本と生産関係を維持し得る基本資源を、圧倒的な自己外在として「植民地収奪」のものでしかなし得ない帝国主義にとつては、外に對する収奪の強化に侵略・植民地支配を、米帝のその欲求とはまったく異質な絶対不可欠なものである事に依り、他方で内における「反革命」—国家主義・排外主義統合の「国内(城内)平和」はその絶対的命題なのである。

七〇年代突入以降、とりわけE.C帝の弱い環たるフランス・イタリアにおいてこの「ファシズム化」は過剰資本の累積・市場飽和—雇用停滞という経済危機に対する一時的な政治解決としてのインフレ—安定成長戦術の展開の結果が生ぜしめた「政治危機」に対する、より高度な政治解決としての社・共政治委員会の政治統合の移動として、国内的な「階級和解」の道をブルジョアジーに採らしめ、それは七〇年代中期において決定的な政治方向となり、そして七〇年代後期から八〇年代初期における「社民十社排」政権化構想として完成されつつある。

ユーロ・ソシアリズムとユーロ・コミュニズム(白い共産主義)という、いわゆる「先進国革命派」の政治部門への登場は、その前提として「経済の民主化」「経営参加」そして「国家民主主義」を前面に立て、局面的対立を有する西独社民や北政社民との結果的同質性をもって、ブルジョア独裁の新しい、しかし最後の支配体制として資本主義防衛の前面に立ちつつあるのである。

日帝内においては、歴史的特殊性をもつ社会党の「永遠なる少数派」からの脱皮の困難性をして日共(社会排外主義派)の社民化での連携だけでは政治安定を望めない事によって、社公民中軸から社共ブリッジ、そして新自由クラブをも包摂しての「連合体制」が課題

のほりつつある。しかし、そのいかなる政治権力表現が登場しようとも、それ自身がブルジョア独裁の戦術的支配のひとつにしかすぎず、徹底した階級性の解体のうえでこそ、その政治部門が完成す

るのである。

政治支配構造の表層的局面のみ把えての現状分析は、不可避的にブルジョア階級の階級攻撃の本質を曖昧化させ美化し、それは結果として、それとの対決をいわゆる戦術主義的な大衆の抵抗一般に、その組織的形態にのみ階級闘争の戦術・組織を、いわば「下から」のそれとして規定してしまうのである。

「関西赤軍」の現状分析の誤りは将にそれである。尚つけ加えるならば、我々は今日の階級再編の「ファンズム化」への方向を、逆に階級闘争総体においては、その危機が世界革命の現段階の世界プロ独の圧倒的優勢に規定されている事も含め、かつその再編それ自身が次の新たな階級衝突を生じさせざるを得ないという事において、我々プロ独―共産主義革命派の大いなる飛躍期である事を、「関西赤軍」の諸君が指定していると同じく確認をして

第四章

階級意識の即目的表現に拝跪した統一戦線の「三種」論の自然発生性

最後に「関西赤軍」の党的限界を確認する点で、その最も大きな限界点として「三種の統一戦線」構造をあげなければならない。先に整理され止揚された「統一戦線問題」に対する党的原則的態度を確認しよう。

①今日の世界プロ独へ向けた単一的革命闘争の時代における統一戦線は、「革命戦争統一戦線」「革命戦線」と「反帝国主義統一戦線」「反帝戦線」の二種の戦線しかあり得ない。

②統一戦線それ自身の政治的軍事的形態は多様であり、戦術・組織はその戦線の闘争局面によって決定されるにすぎず、ただその戦線をつかつかつものは戦略方向の差以外ではない。

③革命戦争は世界プロ独―世界共産主義を射程にするプロ独―社会主義革命の統一戦線であり、反帝戦線は帝国主義の政策および帝国主義的動向の結果に対する抵抗闘争総体の統一戦線であり、一方は目的意識的密集性を要求し、他方は自然発生的の広範さを要求する。

ンでの先進性や戦闘性は何ら目的意識的政治、すなわちレーニンの言う「政治闘争」のレベルにはなり得ないものであり、大衆の自然発生的反抗の運動という地平でのそれではなく、従って賃金闘争も三里塚闘争もそれ自身としてはまったくの同地平の運動でしかない。三里塚・日韓・狭山へと個別闘争を結合させる事を「政治闘争への結合」と位置付け、その「政治闘争」を闘う反帝戦線、個別闘争を担う人民戦線とを分列化させ、それ自身結果としての帝国主義政策への反対の闘いを「政治闘争」としてしまふ事は、本来の政治闘争の位置である権力を巡る闘い―革命闘争IIプロ独―共産主義を自然発生的に解体してしまふ、そしてその自然発生的に運動として拝跪する事をのみ視点化する。徹底した「小ブル急進主義」の道を歩む事になる。

「反スタ」体制間矛盾論・「第三世界」合流論を止揚し、「反スタ論」の変種―「反社帝論」の日和見主義を批判する―

（反スタ派への屈服―「一向過渡期世界論」の毛派的改作について）

No.13 続

この論稿を進める前に、関西で開催された興味ある集会について言及しておきたい。「北方領土」・日韓・沖繩をたたく七・三人民連帯大会がそれである。この大会名称から、この会の党派的性格、組織団体を割り出せる諸君は、まさに鋭敏な政治感覚を有している。ヒントを与えよう。「会場のロビー」には、種々のグループが書店を出したり、パンフレットを販売している。東方書店、こぶし書店、ラジカル懇談会、金武鶴を守る会、大経大新聞会など……。そう、毛派（日中統）―民同―カクマルの歴史的大野合反ソ集会である。もちろん、日韓・沖繩は添え物であり、反ソキャンペーン一色に塗り込められた集会であった事は云うまでもない。この現象を

（尚詳しくは「XX13号」の中央書局論文「プロ独戦争派の陣型―党と戦線問題の歴史の止揚の為に―」を参照されたい）

統一戦線を「関西赤軍」は「革命戦線」「反帝戦線」「人民戦線」の三種の構造として提起し、しかも関西の地で実践してきた。

ある意味で直接的な闘争現場と大衆指導の局面で、この三種構造は大衆の説得力を、たとえば革命戦線は「赤軍」、反帝戦線は「闘争委」、そして人民戦線は「組合」というレベルで有していたであろう事はうなづける。またその事で「関西赤軍」がそれまでの長期の労働者フラクションから脱皮し、主に学生戦線への圧倒的拡大を創り出した事も我々は認める。

しかし、問題は反帝闘争の全面指導とその攻勢、しかも再編が共産主義革命の側の指導として要求されている時、反帝闘争を二重構造で陣型化する事は徹底した自然発生性への自己解体である。革命戦線の規定は若干の批判を別にすれば、おおむね正しいであろう。

反帝闘争の把え方に大きな誤りがある。一般的な即目的プロレタリアートの資本―帝国主義への反発・憤激・反抗を、ある意味でその戦術形態や組織形態でもって区別し、反帝闘争内部におけるその範囲内での戦闘性や先進性をもって、あたかも階級性、政治性の高度化としてしまひ、その部門による遅れた大衆の指導部門としてしまふ事は、まったくの党的視点の欠落であり、指導中核の党的政治を「下から」の反帝闘争の自然発生的政治傾向である、いわゆる「民主主義政治」に小ブル急進主義政治でもって解体してしまう事であり、党的共産主義政治を民主主義闘争に解消させてしまふ事に通じる。

下からの組織形成という方向においては、この反帝闘争内部における「先進性」「後進性」の差は抜きさしならないものであり、それをどうしても二重の組織構造にせざるを得ない必然性を我々は確認する。しかし、政治闘争―共産主義革命においては、その種の民主主義闘争の範囲内での大衆動向に何の区別をもつてはできないのであり、それはやはり自然発生性一般でしかない。

逆の意味では、反帝闘争それ自身においてはその戦術やスローガ

反帝闘争の急進性一般が、何かあるべき政治的高地では決してなく、それはいかにおくれた運動として見えようとも反帝闘争としてある「全人民的闘争」の一部でしかない。

小ブル急進主義と民主主義派はその根幹では同列である。

しかも、反帝闘争は広範であればあるだけ有効なのであり、そこには種多な思想性や政治性が入り込むのであり、その自然発生的結合にこそこの反帝闘争の「生命」が存在するのである。

日共・カクマルと中核派をこの自然発生性の範囲内で区別するものは、その「急進性」一般でしかない。

統一戦線構造は未来からの目的意識性としての「革命戦線」II「赤軍」、今日での自然発生性としての「反帝戦線」の二者しか存在し得ないのである。

奇異に感じる諸君がいるとすれば、諸君の政治意識はすでに時代遅れな代物である。数年前ならもちろん夢想だにできない現象ではあるが、政治感覚の鮮鋭な諸君ならば首肯するに足る政治的・歴史的背景があるのである。この論稿の副題（反スタ派への屈服―「一向過渡期世界論」の毛派的改作について）が、この二つの潮流の合流する歴史の必然性を革命戦争派の現代革命史観をもって暴露する警鐘として準備されたものであるが、加速度的に進行する政治状況に後追いつける事になった。結論として準備されたこの論稿の主題を浮上せしめるだろう。基調はとりもなおさず「北方領土返還運

動」における帝国主義的排外政策である。この「国民運動」の排外的性格は、この間の帝国主義者とその随伴者の動向—ブルジョアマスコミ、議会内改良主義政党、右翼を総動員した反ソ宣伝に特徴づけられる。もちろんこの運動は、零細農漁民の切り捨て—棄民政策の隠蔽にこそ本質がある。しかしそれが、帝国主義間水平分業体制—ブロック化として一時的な和解を強制された矛盾の体制内における対立、衝突—(農政、土地問題)から、そしてその階級間対立としての発現を体制間—国家間対立としてスリカエる帝国主義者の常套手段であるという意味において、より一層の本質的内容を有している。つまり、帝国主義者はこの運動において二重の成果を獲得したのである。恐らく、遠くから、この問題に関する政治的立場が、フランスムがプロレタリア独裁かを分ける分水嶺になるだろう。反スタ派(カクマル)と反社帝派(毛派)が、手を携えて、帝国主義的排外主義を唱和する路線の根拠が存在するのである。そしてそれがこの論稿の主題なのである。反スタ派「体制間矛盾論」と毛派「三つの世界論」(今や、それへの溶解を党派性とした「三ブロック階級闘争論」)の等質性は、その図式と組合せの相異を捨象して、階級間対立を水平主義的国家間対立(帝国主義世界観)に置き換える事である。彼らはその事によって自国ブルジョア界を免罪し、階級間対立を等閑し、プロレタリア階級を裏切るのである。レーニンはいくり返し言っている。「実際の国際主義は一つしか、ただ一つしかない。すなわち、自国内の革命運動と革命闘争とを進展させるために献身的に活動すること、例外なくすべての国でこれと同じ闘争、これと同じ方針を支持し、ただそれだけを支持すること(宣伝によって、共感によって、物質的援助によって)である。」原則は、「主要な敵は自国内にない」ということである。また、この二派の類似点はこれに止まらない。この二派は、「党派闘争ならざる党派闘争」ととりわけ熱心である。「向自的党派闘争論」や「社帝主義」等体系的である。帝国主義との闘争は、それが日和見主義に対する闘争と不可分に結びついていないならば、一つの空疎で虚偽の空文句にすぎない。これはレーニンの言葉である。そしてこの逆命題をも承認し

なければならぬ。「日和見主義に対する闘争は、それが帝国主義に對する闘争と不可分に結びついていないならば……」これが「党派闘争」の基準である。所謂「謀略論」や「KIIK連合論」や「敵の敵は味方論」には、この基準が決定的に抜け落ちている。なお中核派「戦争論II内戦戦略」(二重対峙—先制的内戦戦略)は、一定の歴史の妥当性を持つているが、「KIIK連合論」とは相容れないので、これを降すべきである。「北方領土返還問題」については詳論を別稿に譲って、この具体的事例を検証して、如何に塩見氏が「毛教条主義」と反スタ反マルクスを相互使用—したかを解明してゆきたい。

II 「社会主義国家」の現代史的位置 II

我々はこの「後進国社会主義革命」の経済的基礎と、それに規定された「社会主義社会」の政治・経済体制の疎外について語ろうとしている。そして、それが一つの思想の、一人の指導者の恣意的な体系でもなければ、その結果でもないという事、それはすぐれてその唯物論的基礎と弁証法的発展段階の必然性の合法則性の外化であるという事について語ろうとしている。ロシア—東欧—中国—中部アフリカ—インド—南三國と運動する「後進国社会主義革命」の勝利として、「現代過渡期世界」の現代革命史観を指定する作業である。その基礎は、とりもなおさず「プロレタリア国際主義」の内実であり、先進国プロレタリアートの世界的任務(過渡期世界の揚棄)の指定である。資本主義の一定の発展段階から社会主義革命への過渡的経済的基礎と、それに規定された社会主義革命の型について、レーニンとエンゲルスの興味深い「死滅の論理」を展開したい。この引用は、けつして美存する事のない「国家資本主義」と、その擬制の上に構築された「スターリン・レジュム」と「社会帝国主義国家」への反批判である。「資本主義が、その発展の一定の、きわめて高度の段階で、すなわち資本主義の若干の基本的属性がその対立物に転化(量から質へ、自由競争から独占へ)しはじめた時に、資本主義からより高度の社会II経済制度への過渡時代の諸特徴があ

らゆる方面にわたって形づくられ、あらわになったときに、はじめて資本主義的帝国主義となったのである。しかもこれと同時に、独占は、自由競争から発生しながらも、自由競争を排除せず、自由競争のうえに、またこれと並んで存在し、このことよって、一連のとくに鋭くはげしい矛盾、軋轢、紛争をうみだす。独占は資本主義からより高度の制度への過渡である。帝国主義は、その経済の本質からすれば、独占資本主義である。そしてそれは過渡的な資本主義として、あるいはもつと正確にいえば、死滅しつつある資本主義として特徴づけられねばならない。(レーニン)「独占資本主義経済下における社会資本の動員と、生産の社会的分業は、生産諸条件の社会的性質を一層強める。」「しかしながら、株式会社になっても、トラストになっても、また国有が実現されたとしても、生産力の資本的性質はそれでは廃棄されない。株式会社やトラストについては、このことは明白であるが、近代国家もまた、労働者や個々の資本家の侵害に対し、資本主義的生産方法の一般的な外的諸条件を維持するために、ブルジョア社会がつくりだした組織であるにすぎない。近代国家は、どんな形態をとろうとも、本質的には資本主義の機関であり、資本家の国家、観念としての全資本家である。生産力の所有をますます強くその手に収めれば収めるほど、国家は、いよいよ現実の全資本家となり、ますます国民を搾取する。労働者はいつまでもたつても賃金労働者であり、プロレタリアである。資本関係は頂棄され、いよいよ極端にまで推し進められる。だがその頂点に達するや、それは顛覆する。生産力の国有は、衝突の解決ではないが、それ自身の内には、この解決の形式的手段、すなわちそのハンドルがかくされている。(エンゲルス)そしてレーニンはこうも言っている。「こうして、共産主義社会の第一段階(普通にはこれが社会主義と呼ばれている)では、ブルジョアの権利は、完全に廃止されるのではなく、ただ部分的にだけ、廃止されるのである。ブルジョアの権利は生産手段を個々の私有財産とみとめる。社会主義はこれを共有財産にする。そのかぎり、しかしただそのかぎりだけで—ブルジョアの権利は消滅する。しかし、ブルジョアの権

利は、この権利のその他の部分では、社会の成員間への生産物および労働の分配の規制者(規定者)としてやほりのこっている。」「またエンゲルスは、階級分化の経済的基礎について、「ごくわずかの剰余しかを生産しない間は、したがって社会全員の大多数が終日もしくはほとんどの終日、労働に従事しなければならぬ間は、この社会は必然的に階級に分裂する。専ら労役に使役される大多数とならぬ直接的生産的労働から解放された一階級が形成され、それが労働の指揮、國務、司法、学問、芸術などの社会の共同事務を行うのである。」「馬氏は、「官僚階級論」の指定にこの一文を引用している。そして、故意にそれにつづく次の文に言及していない。右のように、階級分裂はある一定の歴史の根拠をもつものであるが、それはただある一定の期間内においてのこと、与えられた歴史的条件下においてのことである。これは生産が不十分なためであり、近代的生产力が十分発展すれば一掃されるに相違ない。(これが、スターリン生産力主義の文献的根拠である。)」

我々はこの「後進国革命」の、即ち資本主義的生産関係の廃止のための物質的諸条件が未成熟な「国家」あるいは「半国家」における「社会主義革命」に言及している、そして同時に、それは「社会主義革命」一般であつて、「プロレタリア独裁」ではない事を論証しようとしている。社会主義革命—反帝権民地革命戦争の此岸において、プロレタリアートはどの一國においても人民の大多数をしめてはいなかった。

現実に人民の大多数を運動にひきいれる「人民」革命は、プロレタリアートと農民のいづれをも包摂したときだけ、このようなものとなることのできた。両階級こそがその当時「人民」を構成していたのである。この両階級は、「官僚的II軍事的国家機構」が彼らを抑圧し、圧迫し、搾取していたことよって統一されていた。この機構を粉碎しうごくことを「これが「人民」の、人民の大多数の、労働者と農民の大多数との真の利益であり、これが貧農とプロレタリアートとの自由な同盟の「前提条件」であつて、このような同盟なしには、民主主義は不安定であり、社会主義的改造は不可能であ

る。そして、この粉砕された国家機構は何によっておきかえられたか。レーニンはその答えを述べている。

「われわれは、一挙に、あらゆる行政府、あらゆる服従なしにやうにゆるゆると考えるような夢想家ではない。プロレタリアートの独裁の任務の無理解にもとづく無政府主義者のこの夢想は、マルクス主義とは無縁であって、実際にはただ、社会主義革命を、人間が今とちがったものになるときまでひきおすのに役立つにすぎない。いな、われわれは、現在のままの人間、つまり服従や統制なしには、「監督と簿記係」なしにはやってゆけない人間によって、社会主義革命を遂行することを欲しているのである。しかし、すべての被搾取労働者の武装した前衛—プロレタリアートには服従しななければならぬ。国家官吏に特有な「統轄」は、これをただちに今日明日にも、「監督と簿記係」の単純な諸機能—今日ではすでに都市住民一般の発達水準で十分まにあい、また「労働者の賃金」によって完全に遂行できる諸機能—をもつておきかえはじめることができるし、またおきかえはじめなければならぬ。」

そしてレーニンはその前提条件として、①資本主義は「国家」行政の諸機能を単純なものにする。それは官吏の「統轄」を廃棄して、全社会の名において「労働者、監督、簿記係」を雇うプロレタリア（支配階級としての）の組織に万事を帰着させることを可能にする。②このような経済的前提があれば、資本家と官吏を打倒したのち、彼らを一生産と分配との統制の事業で、労働と生産物との計算の事業で—武装した労働者、武装した全人民（一連のものとも進んだ資本主義諸国です）で実現されている、だれでも読み書きのできることで、郵便、鉄道、大工場、大規模商業、銀行業等々の大規模で複雑な社会化された装置によって、「教育と訓練」をうけた）をもつておきかえの事をくり返して述べている。そして「階級の存在は、この一定の歴史的發展段階だけと結びついている」事を、ロシアの後進性と重ねた時「ヨーロッパ革命」との結合をロシア革命の勝利の環として指定したのである。裏切ったのはスターリンではなく、「先進国プロレタリアート」であった。

—さえ残存するということになる。（レーニン）

それは、資本主義の母胎からでてくる社会で経済的・政治的に避けられない。対馬氏は、このロシア社会を「官僚制国家資本主義」と名づけている。レーニンはくりかえし述べている。「社会主義は生産手段を共有財産にする。そのかぎりだけで……」、「社会主義」の一切の基準は生産手段の所有形態—社会的共有がすべてなのである。そして、そのかぎりではこれら「人民」国家は、その経済的基礎において、「社会主義国家」なのである。対馬氏は、この経済的基礎のカテゴリーをしばしばその国家形態と混同する。我々は、この①経済的基礎②国家形態の区別と連関性を明確にしなければならぬ。官僚制が「階級」として現象している物質的根拠は存在している。これは、エンゲルスの指摘を指標として指定しうる範囲においてである。そうだとすれば「官僚社会主義」であって、やはり「官僚制資本主義」ではない。また、こうした混乱は、同じ穴のムジナ—I我が「プロカク派」の諸君にも相見できる。「社会帝国主義とは国家官僚制資本主義を基礎」とし、世界革命戦争の攻勢の段階に革命的に順応し、延命せんとする帝国主義であり……（「エセ」赤軍」19）後段の批判は続編で展開するとして、この「社会帝国主義の基礎」が「国家官僚制資本主義」の用語上の不分明について若干の批判を試みたい。

「国家官僚制資本主義」—（ブルジョア的地主的所有の防護を、資本の一層大規模な集中と国家独占—統制の強化、軍事的な強制的奴隷労働の苦役と慢性的な失業—半失業の釘付け、労働者への犠牲と弾圧において延命せんとする中小資本家の欲求の後で、貧農・勤労農民の切りすて、農村ブルジョアジーの擁護と最も劣悪な農業プロレタリアの強行的拡大……）（同19）後段冗長に流れて噴飯物ではあるが、これも塩見氏好みの「窮乏化法則」への義理立て、留意して結局「資本の一層大規模な集中と国家独占」が当為する部分である。レーニンは、独占資本主義を「その経済の本質において、資本主義的独占であるところの資本主義である」と規定している。そして、帝国主義とは、独占資本主義にはかならない。次の指摘はき

プロレタリア独裁と一体的に遂行されない社会主義建設は、不可避免的にブルジョアなきブルジョア国家へと形骸化されてゆく。マルクスは一八四七年に次のように書いた。

「それにしても、ブルジョアジーは、政治的に、すなわち国家権力によって「所有関係における不公平を維持する」としても、このものをつくりださしめない。近代的分業、交換の近代的形態、競争、集中などによって条件づけられた「所有関係における不公平」は、けっしてブルジョア階級の政治的支配から生じるのではなく、反対にブルジョア階級の政治的支配は、ブルジョア経済学者によって必然的、永久的法則となりと宣告された、この近代の生産諸関係から生じるのである。したがって、プロレタリアートがブルジョアジーの政治的支配を打倒するとしても、歴史の「運動」のうらに、ブルジョアの生産方法の廃止を、したがってまたブルジョアの政治的支配の決定的打倒を必然的ならしめる物質的諸条件がまだつくりだされていなければ、その勝利は一時的なもの、ブルジョア革命の過程における経過点にすぎず、一七九四年同様、ブルジョア革命そのものに役立つことにならう。」

「こうして、成立した共産主義社会の第一段階（社会主義）では、「ブルジョアの権利」は、完全に廃止されるのではなく、ただ部分的にだけ、すでに達成された経済的変革の度合に応じてだけ、すなわち「生産手段」にかなってだけ、廃止されるのである。「ブルジョアの権利」は生産手段を個人個人の私有財産とみとめる。社会主義はこれを共有財産にする。そのかぎりでも—しかもそのかぎりだけで—「ブルジョアの権利」は消滅する。しかし、「ブルジョアの権利」はこの権利のその他の部分では、社会の成員間への生産物および労働分配の規制者（規定者）として、やはりのこっている。消費手段の分配についてのブルジョアの権利はもちろん、不可避的は、ブルジョア国家の存在をも予想する。なぜなら、権利なるものは、権利の基準の遵守を強制しうる装置がなければ、ないのも当然だからである。そこで、共産主義のもとでは、一定期間、ブルジョアの権利が残存するばかりでなく、ブルジョア国家—ブルジョアジーのいない

わめて教訓的（プロカク派の「知半解的国独資論」として）である。

「地主—資本家国家の代わりに、革命的民主主義国家、すなわちあらゆる特権を革命的に破壊する国家、もっとも完全な民主主義を革命的に実現することをおそれない国家をもってきたまえ。そうすれば、ほんとうに革命的民主主義的な国家のもとでは、国家独占資本主義は、不可避的に、必然的に、社会主義への一歩、国家独占資本主義を意味することがわかるだろう！なぜなら、巨大な資本主義企業が独占体になれば、つまり、それは全国民の必要を満たすことになるからである。もしまたそれが国家独占体になれば、つまり、国家（すなわち、革命的民主主義がある）には、住民の、まず第一に労働者と農民の武装組織）がこの企業体を指導することになる。—だれの利益となるように指導するのか？—地主と資本家の利益となるようにか。それなら、そこにあるのは、革命的民主主義国家ではなくて、反動的—官僚的國家、帝国主義的共和国だということになる。—それは社会主義への一歩である。なぜなら、社会主義は、国家資本主義の独占からつぎの一步をすすめたものにはかならないからである。いかにすれば、社会主義とは、全人民の利益に奉仕するようになった、そしてそのかぎりでは資本主義の独占でなくなった、国家資本主義の独占にはかならないのである。国家独占資本主義が社会主義のもっとも完全な物質的準備であり、社会主義の入口である（「さしせまる破局、それとどうたたかうか」）すなわち、それでもなお「社会主義」なのである。国家資本主義の「資本主義」であるゆえに、国家管理部分にあるのではなく、資本家の部分に存在するのである。レーニンが細心に「国家独占資本主義」から「国家資本主義的独占」を峻別しているのは、国家資本主義の社会主義に対局するまさに弁証法的転化に達するからである。今一度エンゲルスの指摘（前述）を想起しなければならぬ。しかし、「社会主義国家」においてなおも残存する分配—交換過程における資本主義的取得の矛盾が、一方で、官僚階級ではなく新たな資本家階級を再生産しているとするならば、彼らの階級としての存立基盤—資本の個人的所有を貫徹して

いるとするならば、それは「国家独占資本主義」体制であって、帝國主義体制である。その時は「官僚」を挿入する根拠はない。また、「社会帝国主義」も不適当である。さらに乱暴なのは、帝國主義國家もその基礎を、ソ連「社会帝国主義」と同じ「国家官僚資本主義」体制とする横着さである。まさにかのブルノフ氏の「官僚制集産主義」は自動的に共産主義に導くというあの発想と同律反である。帝國主義國家において、資本主義に冠する官僚が登場したのでは、ブルノフ氏の予見も満更嘘でなくなってしまう。もちろん彼らが強弁したいのは、ソ連社帝も、米帝も、日帝も、同根の經濟体制を有しているという偏執的作為であるだろうが、「帝國主義論」は捨てるのか。

我々はこの「後進國社会主義革命」から成立する「社会主義國家」の善債的・上部構造論の逆規定として、「プロ独社会主義」に對置する「人民社会主義國家」↓「官僚社会主義國家」の名称を提起したい。「プロ独社会主義」はもちろん世界同時革命↓世界プロ独社会主義↓世界共産主義として措定される「共産主義の高次な段階」へ至る「過渡的政治・經濟体制」である。「人民社会主義國家」↓「官僚社会主義國家」は、世界同時革命↓世界プロ独社会主義へと合流する事によって揚棄される。

II 「過渡期世界」とプロレタリア國際主義 II

「過渡期世界」を省察する上で、この「プロカク的」社会帝國主義論の經濟的本質規定からする下部↑上部構造の連関矛盾を暴露する事は積極的な意味をもっている。「スターリン主義國家」あるいは「社会帝國主義國家」の出現が一つの思想、一人の指導者の変節過程ではなく、まさにその一定の歴史的發展段階と結合している。この立場から今一度、「対馬現代ソ連論」と、それに立脚した「塩見社会帝國主義論」における階級史觀の空洞化を批判する。

「このような社会の分割は、生産を支配するものが、自分たちの利益になるように分配をも支配するに至るところまで行かずに済んだか(何と恣意的な)の勝利的國際資本主義の只中で孤立した後進國へ転落するのであり、②國家資本主義段階における「社会主義革命」は、「労働者國家」の過渡的段階を経て社会主義へ至るのである。我々は、これを次のように書き換えなければならない。①後進國における「人民」社会主義革命は、資本家階級が廃絶されるが故に、「先進國主義本国内プロ独共産主義革命」と合流しないかぎり、不可避的に「官僚社会主義國家」へと転落する。②帝國主義段階における「プロ独社会主義世界革命」は、共産主義への過渡的政治權力↓支配階級として組織された武装プロレタリアの國家↑世界プロレタリア独裁を経て世界共産主義に至る。

ソ連はダメだがベトナムは評価できると云う諸君がいる。ソ連はダメだが中国は評価できると云う諸君がいる。マルクス主義は、科学的共産主義の思想である。「リンゴの樹にブドウはならない」という思想である。と同時に、人間の精神活動の抽象性を発揚する思想である。そして、「実践」がそのかけ橋である。マルクス主義者は、あれやこれやと世界を説明するのではなく、世界を変革する能動性において実践的分析を貫徹しなければならない。我々は、「スターリン主義國家」、「社会帝國主義國家」ソ連を擁護しようとするのではない。また、中国の國際反革命的「人民外交」を許容しない。と同時に、一國社会主義建設路線の内の矛盾の排外的拡張政策を、そのプロレタリア國際主義の反帝國主義統一戦線の内実において一定の評価を与える。國民經濟の未成熟性と連動した「社会主義國家内階級闘争」二つの道の闘争↑プロ独永続革命論」を弾固として支持する。しかし、これらの総路線が、その經濟的本質から規制されて、一方における「生産力主義」であり、「四つの近代化路線」の政治的・經濟的表現である客觀的定在性にこそその歴史的發展段階の主導的契機を同定しなければならぬ。「反スターリン主義」、「反社会帝國主義」すなわち、ことばのうえで社会主義者、行動のうえで帝國主義者、我々の綱領的立場である。しかし、それが路線でないのは、「世界を説明」する地平から、「世界を色分け」する地平から、「世界革命戦略—陣型」が、真のプロレタリア國際主義的内

における労働者革命(?)は—たとえ資本家が廃絶されるとしても(これが本質である)—資本主義的發展の「過程における経過点」以外のなにものかでありうるか?…したがってわれわれは、國家をいわずば所有して、蓄積過程を管理しているロシア官僚は、もともと純粋な形態における資本の人格化であるということが出来る(「現代ソ連論」)共産党宣言から、その一ページから改作が試みられている。「ブルジョア階級とは、近代的資本家階級を意味する。すなわち、社会的生産の諸手段の所有者にして賃金労働者の雇傭者である階級である」、誰が生産手段を所有しているのか? この一切の基準を反古にして、國家を所有(?)して、蓄積過程を管理(?)する構図にロシア官僚の資本の人格化を画する資本主義論が如何に荒唐無稽な代物か加えて次の一文でより明白になる。「國家は、雇傭主であり、人民全体の上になつようみえるが、現実には集団としての官僚の組織体にはかならない」、國家は階級対立の非和解性の産物であり、階級支配の道具である。「カウツキーは(対馬氏は)、ここであいかわらず、國家に対するあの迷信的崇拜、官僚主義に対するあの迷信をさらけだしている(レーニン)日和見主義者によるマルクス主義の卑俗化」、生産様式と分配法則を独立的に取り扱ってはならない。日本の鐵道事業は大半が國有化されている。しかしその利益は、やはり資本の力に応じて(金融資本を通じて、不平等な運賃によって、公共事業によって)分配されている。そしてプロレタリア人民はこの公共事業によって二重に収奪されるのである。資本が、社会的生産手段が社会の名において共有されている限り、一切のブルジョア権利の、不平等の残存にもかかわらず、それはやはり「社会主義」なのである。対馬氏のこの經濟決定論的誤謬は、けっしてここにとどまるものではない。「國家資本主義論は社会主義革命の此岸における社会主義への過渡的段階であり、これに對して、労働者國家は、社会主義革命の彼岸における社会主義への過渡的段階である」ということである。これを前述の引用と比較してみるならば、対馬氏の「革命觀」が如何に大雑把で、恣意的で、無系統的であるかを鮮明にするだろう。①後進國における「労働者革命」(?)は、たと

実(國境を此岸において突破する)が生れ出てこないからである。スターリン主義や鄧小平主義—総じて生産力主義を「革命への真切り」や「変節」と百万遍批判したところで、その唯物論的・現実的・微動だにしないのである。その生産力主義(經濟決定論)が、一國社会主義建設路線が、一個の觀念の、その思想体系の産物ではないのと同様に、世界同時革命が、世界共産主義が机上の空論ではない階級危機の世界史的蓄積が、その量より質への転化動因↑階級の力として存在しているのである。求められているのは、世界プロ独樹立を決定的環とした先進國主義本国内プロレタリアートの世界革命戦争における主導性なのである。

「現代過渡期世界」を特徴づけている動因は「後進國社会主義革命」である。帝國主義の基本的標識—「商品輸出と區別される資本輸出」—と、その政治的原理—民族の抑圧と併合への熱望が、ほかならぬ後進諸民族をして(近代資本主義國家においてでなく)、社会主義革命への目標をおしたたげたのである。「あらたに開發された國々についていえば、そこに輸入された資本はもろもろの矛盾を増大させ、民族的自覚に目ざめつつある諸民族の侵入者にたいする抵抗をたえず増大させる。そして、この抵抗は容易に成長して、外國資本にたいしてむけられる危険な手段になりうる。古い社会的諸關係は根本的に革命され、「歴史なき民族」の数千年来の農業的孤立性は破棄され、彼らは資本主義的渦巻のなかに巻きこまれる。資本主義そのものが、被征服民族に、解放のための手段と方法をしだいに与えていく。そして、これらの民族もまた、かつてヨーロッパの諸民族にとって最高のものであった目標を、すなわち經濟的および文化的自由の手段として統一民族國家の建設という目標をおしたてる。この独立運動は、もともとは輝かしい将来の見通しを約束しているもつとも貴重な搾取領域で、ヨーロッパの資本をおびやすか。そしてヨーロッパの資本は、ただその軍事力を不断に強化することによってだけ、その支配を維持できるにすぎなくなる(金融資本論)この帝國主義的侵略と領土的占有は同時に、沸点にまで達した本国内階級間対立の外化↑疎外態として、すなわち階級間対立の國家間—

民族間対立への転化—階級矛盾の集積として民族的抑圧と経済的隷属を拡大する。それは、被抑圧民族—国家における資本生産の社会諸関係の強権的拡大として、一方における買弁ブルジョアジーの育成と、その対極における貧農都市プロレタリアートの分化として現象する。資本投下と軍事的専制において、土地と資源を強奪—強蓄積し、生産手段を奪い、商品経済の渦に巻き込まれた中小貧農を都市下層プロとしてブルジョアに、更にはその労働力を収奪する、富の集中と貧困の拡大という悪無限的階級分裂を促進するのである。そしてこの富の強盗的分配を通じて労働貴族を育成し、帝国主義労働運動を排外主義に吸引するのである。

「多くの産業部門のうちの一産業部門、多くの国のうちの一国、等々で、資本家によって独占的高利潤が獲得されることは、労働者の個々の層を買収し—もともとは一時的であり、またかなり少数のものをではあるが—、それらの労働者を、その他のすべての労働者に対立させて、当該部門あるいは当該国のブルジョアジーの側にひきつける経済的可能性を、彼ら資本家に与える。そして、世界分割をめぐる帝国主義諸国の敵対関係の激化は、この傾向を強める」(レーニン)

「後進国被抑圧民族」の民族解放闘争が、その宗主国の発展段階(帝国主義段階)に逆規定されて、すなわちその支配の型(帝国主義的支配)を反映して、その対極に革命の型を指定するという歴史的運動のパラドクスが支配している。そしてその革命—社会主義革命の勝利的展開の要因は、寄生的買弁ブルジョアジーの支配階級としての未成熟と同義反復としてある「半国家」的国家機構—宗主国軍隊とカイリイ政府と—、民族として集積した被圧階級の階級的力、そして頂点まで達した階級の憤激—反抗を「民族革命的」運動として組織した事にある。そして何より、次のレーニンのテーゼ(コミンテルン第二回大会—一九二〇年)を対置して、現代過渡期世界における「後進国社会主義革命」の主導的位置と、成立した「社会主義国」におけるプロレタリアートの任務を確認する。

「いま解放されつつある後進諸民族、そして戦後の今日にはそれ

されるものでない。一方における高度に発達した工業諸国の併合(帝国主義間戦争)への熱望と、非資本主義ウクランド(社会主義国家)の再分割戦への熱望として登場する。加速度的に、真紅に塗り変えられてゆく世界地図の中で、彼らのバイはますます小さくなってゆく。そして、彼らが帝国主義である限り、帝国主義である事をやめない限り、地球の終局的分割はありえないのである。

「一国で勝利をおさめた社会主義は、一挙にあらゆる戦争一般をけつして排除するものではない。反対に、それは戦争を予想するのである。資本主義の発展は、さまざまの国で、きわめて不均等におこなわれる。商品生産のもとは、それ以外ではありえないのである。したがって社会主義はすべての国で同時に勝利することはできないという否定しがたい結論が出てくるのである。社会主義は、はじめは一方国または数カ国で勝利するのであるが、その残りの国は、いくらかの期間はブルジョア的あるいは前ブルジョア的な国にとどまるであろう。このことは、摩擦をひきおこすばかりでなく、社会主義国家の勝利をかちとったプロレタリアートを粉砕しようとする、他の国々のブルジョアジーの直接の努力をもよびおこすに違いない。このような場合、われわれの側からの戦争は正当であり、他の諸民族をブルジョアジーから解放するための戦争であろう。エンゲルスが、一八八二年九月十二日付のカウツキーにあてた手紙のなかで、すでに勝利をおさめている社会主義が防衛戦争をおこなう可能性をあらかじめ認めているのは、まったく正しい。勝利をかちとったプロレタリアートが他の国々のブルジョアジーに對して行なう防衛「戦争」のことこそ、彼は念頭においていたのである。」(レーニン—プロレタリア革命の軍事綱領)

「どんな戦争も別の手段による政治の継続にすぎない。」このテーゼは「革命戦争派」にあって、そしてすべての革命的プロレタリアートにあって、中軸に据えられなければならない。我々は、これら「戦争」の性格を「説明する」立場からではなく、分析的方法で、主体的方法で、つまりは「実践」的方法で揚棄しなければならぬ。これが、帝国主義本国内革命的プロレタリアートの任務である。我

らのあいだに進歩の線にそう運動がみとめられるところの後進諸民族にとって、国民経済発展の資本主義的段階は避けられないかどうかと。われわれは、この問いに否定的な答えをあたえた。もし勝利をえた革命的プロレタリアートが、後進国民族のあいだに系統的な宣伝をおこない、ソビエト政府が、その駆使しうるかぎりのあらゆる手段をもって援助にのりだすならば、そのときには、発展の資本主義的段階は後進の諸民族にとって避けられない、と考えるのは正しくない。すべての植民地および後進国において、われわれは、たんに自主的な闘士のカードルや党組織を結成するばかりであってはならない、またたんに農民ソビエトを組織するための宣伝をただちにこない、これらのソビエトを前資本主義的諸条件に順応させることに努力するばかりであってはならない。」

後進国民族解放闘争が「社会主義」の水路へ導かれる事の帝国主義一元的世界史過程における内的連関性を、「国家による国家の搾取」という帝国主義段階における「特殊段階論的」現代革命史観として定式化するその同律性の内に、勝利した「社会主義国家」の単一の世界革命史過程における能動的、階級本質論的役割は「社会主義戦争」である。それはかつて、ブーリンが「攻勢戦術」として定式化したプロレタリア的「膨張」である。そしてこの戦場は、中部アフリカにおいて、南アメリカにおいて、すでに切り拓かれていく。キューバ「国際義勇軍」を尖兵とするこの「革命の輸出」路線の復権は、世界武装プロレタリアートの最前線にあって、世界革命戦争の外縁を形成している。

すでに勝利した社会主義が、「防衛戦争」から「社会主義戦争」へと上向する「階級闘争の世界史的攻撃段階」に到達したものである。そしてこの「戦争」は数年の内に、ますます現実のものとして登場するだろうし、その物質的根拠は存在している。すなわち、反帝植民地革命戦争の「社会主義革命」としての圧倒的前進は、ますます帝国主義的併合の熱望を高めるのであり、決してその逆ではないからである。この熱望は、決して植民地(農業地域)占有一般に制限

々は、二つの「戦争」(①後進植民地、半植民地国家からする反帝植民地革命戦争、②「社会主義国家」からする社会主義戦争)の単一の世界革命史過程における攻撃的性格(階級闘争としての)を分析した。そして現代過渡期世界におけるこれら二つの「戦争」の主体的定立性は、「世界社会主義」の勝利に到達するのである。これは大きな進歩である。しかし十分でない。我々は、「社会主義」の基準とその定立性についてすでに立証してきた。そして、それでもなお残存するブルジョアの権利と不平等、ブルジョアなきブルジョア国家の遺制について言及した。勝利した「社会主義国家」、あるいは「世界社会主義」は、その自己運動の内に、この遺制を克服できるであろうか? 答えは、できるかもしれないし、できないかもしれない、である。我々がかつて、このような制度を経験した(原始共産制を経験したように)事もないし、このような未来を夢想する事もないからである。それを理論的に証明しようとする事は、「超帝国主義」の理論を証明しようとするのと同じ位、空疎で虚偽である。社会主義国家の複合体としての「世界社会主義」は、すなわち「超社会主義」の理論であり、「官僚制集産主義」が自動的に共産主義へ導くという理論である。

「人類は、資本主義から直接にはただ社会主義に、すなわち、生産手段の共同所有と各人の労働に應じた生産物の分配に移ることができにすぎない。わが党はもつと先のほうを見ている。すなわち社会主義は、かならず各人は能力に応じて、各人にしては欲望に応じて、を旗にしとする共産主義へ、しだいに成長転化していかざるをえない。」(レーニン)

国家による国家の搾取の時代—帝国主義時代において、その経済的存在条件が強制した後進国社会主義革命—「人民」社会主義国家(本国内階級対立の疎外態)は、本国内階級闘争の主導性においてこそ揚棄されなければならないのである。①階級的存在は生産の一定の歴史的發展段階だけと結びついているということ。②階級闘争は必然的にプロレタリアートの独裁に導くということ。③この独裁そのものは、すべての階級の揚棄と無階級社会に至る過渡をなすにす

きないこと。

産業資本主義段階において、近代資本主義国家は、経済本質には「自由競争」であり、政治形態論的にはブルジョアジーの独裁であった。そしてそこから抽象された社会主義国家は、経済本質的には「計画経済」であり、政治形態論的には近代労働者階級プロレタリアートの独裁であった。そして資本主義の特殊な段階としての帝国主義段階において、帝国主義国家は、経済本質論的には「独占自由競争を排除しない」であり、政治形態論的には「民主主義(全資本家としての国家)」である。そしてこの国家は、自分の姿に似た様々な「社会主義」を生み出した。外に「人民」、「官僚」社会主義であり、内に「構造改革」、「自主管理」、「民主」……「社会主義潮流」である。この潮流の属性は、階級闘争の否定と、プロレタリアの放棄と、共産主義の彼岸化にある。この潮流の興味は、唯一「生産手段の所有形態」にある。つまり「社会主義」一般である。しかし「わが党はもっと先を見ている。」「資本主義から共産主義への過渡は、もちろん、おどろくべく豊富で多様な政治形態をもたざるをえないが、しかしその際、本質は不可避的にたゞ一つプロレタリアートの独裁である。」(レーニン)

すでに論証してきたように、社会主義社会は、資本主義の直接のその中から生れ出たばかりの社会である。その政治形態は、それぞれの社会の歴史的發展段階—階級社会の成熟段階に規定されて様々である。それでもなおこれら様々の「社会主義」が、その思想が、その潮流が、その「国家」が、「プロレタリア社会主義」と峻別されなければならないのは、この体制に「出口」がないからである。たとえこの体制が全世界を覆ったとしても、それは「帝国主義の全般的同盟」と同じ運命を辿るに過ぎない。要は、「プロレタリア社会主義」である。「プロレタリア社会主義」の総路線は、他の如何なる政治思潮とも分有し得ない。現代革命史における高地を獲得しているのである。近代工業労働者階級プロレタリアートの階級力を「死蔵しつづつある資本主義」—帝国主義を打倒し、政治権力を奪取し、支配階級として組織された武装プロレタリアートの国家—プロレタリア独権力をして「国家」

兼—世界革命戦争—世界プロレタリア独権立—世界共産主義建設—

第二のテーゼ

現代帝国主義の恒常的な国内的、国際的侵略抑圧反革命戦争をなし崩しファシズムの階級危機という特質と、それに規定された①発展途上国の民族解放—社会主義、②先進国の前段階共産主義攻撃的蜂起プロレタリア社会主義革命戦争、③プロレタリアの根拠地化と共産主義の継続革命の必然性と其の攻撃性、攻撃性、その三つの階級闘争の結合としての世界性、攻撃性等として位置付けられる逆制約の能動のテーゼ。

〔現代帝国主義の階級危機の特質については統章において論証する。この逆制約の能動のテーゼこそ、「一向過渡期世界論」の水平主義の客観主義のエキスである。もちろん「逆制約の能動性」一般をその位置付けから独立に取り扱わなければ、階級闘争の世界史的攻勢段階における現代革命世界の特質をすくめて描破している。塩見氏の「悪しき体系化」批判がしつようにくり返されるのは、その位置付けの客観主義の対象化にこそ元凶が存在するのである。つまりは、三プロレタリア階級闘争論の羅列主義—水平主義、それは第三のテーゼとしてある革命路線のテーゼ—これ自体として問題はあるのだが—が、この逆制約の能動性のテーゼ、とりわけその位置付け—三プロレタリア階級闘争の本質的内容として展開されねばならないにもかかわらずこれと背離している事、その結果としてある。「革命世界」から「革命路線」を抽象化する立場ではなく、「革命世界」に「革命路線」を対置し、その弁証法的連関性の中からそのジレンマとして「革命路線」を抽象化する立場、これがM.L.主義者の立場である。つまりは、「三プロレタリア階級闘争」間の「先進国革命」を先導とする「逆制約の能動性」こそが語られなければならないのである。これこそ「自国帝国主義を打倒」するプロレタリア国際主義の任務なのである。塩見氏は、壮大に「革命世界」を描写したが、それは結局のところ、面に描いた餅であって、それ(過渡期世界)を止揚する包丁(革命路線)が本物であっても、やはり喰えないのである。塩見氏は「三」と云う数字に異常に執着する余りこの種の間違いをここかしこ

を揚棄する。この合法的不可避性を、此岸における歴史主体的目的の能動性として対象化する、「過渡期世界の揚棄」派としての我々の総路線はたゞ一つである。日本プロレタリア人民は、反帝プロレタリア革命戦争に決起し、世界プロレタリア人民は、反帝プロレタリア革命戦争に勝利しよう！我々のこの単一の路線の立場から、「過渡期世界論」を再構築し、「一向過渡期世界論」の水平主義、その「三つの世界論」への溶解を批判する。

II 「一向過渡期世界論」II

第一のテーゼ

階級闘争の世界史的攻撃段階(つまり、世界革命戦争の形態をもつ世界プロレタリア階級闘争)—世界武装プロレタリアの到達のテーゼ。
〔このテーゼの積極的な擁護は「赤軍派」の党性性である。しかし、このテーゼを、歴史実証的合法的ロシヤ革命の勝利から始まる階級闘争の受動的 성격から攻撃的 성격への転化—として指定するだけでは一面的である。それは同時に、歴史主体的合目的性の時間—空間的定在性の登場として—革命戦略論の現代革命史過程における段階論的内発性として逆規定する実践論の対自化として展開しなければならない。むしろ重心は、その「主観的能因」こそ存在するのである。「革命戦争戦略」(けつして「形態」ではなく)の段階論的普遍性こそが革命ロシヤ成立に波及する「内容」なのである。逆に云えば「蜂起主義者」の日和見主義は、この「内容」に対する客観的—物質的動因を主観主義的に空洞化している点に求められなければならない。革命ロシヤ成立に始まる「世界史的な二重権力」状況の場所的定在性を外的モメントとして、帝国主義段階論的階級闘争を内的モメントとして歴史性—論理性を獲得した世界武装プロレタリアートの登場と、その戦略的飛躍—革命戦争戦略と合法的向上化—プロレタリアの対極化—これがこのテーゼの真髄である。「社会主義」—国家の成立—それを物質的基盤とする「反帝植民地革命戦争」—「社会主義」—国家の量的拡大—その上部構造化—「反帝プロレタリア革命戦争」の主導的展開をもってする「現代過渡期世界」の揚

で犯しているのだが、歴史的なもの—論理的なもの—の弁証法的發展の命題は、「二つから一つあるいは一つから二つ」であって、決して「三つ」ではないのである。つまり、第一の命題と第二の命題が対立(テーゼ—アンチテーゼ)しているのであれば、第三の命題はジレンマとして指定されねばならない。第一の命題に帝国主義の段階的特質が、第二に成立した「社会主義国家」とそれを物的基盤とする「反帝植民地革命戦争」の現代革命史の攻勢的段階が—武装プロレタリアの到達のテーゼ、第三にその「過渡期世界」を揚棄するジレンマとして、先進国革命の「世界革命」—戦略上の路線的解明が提出されなければならない。「逆制約の能動」のテーゼは、この「現代過渡期論」を支配する「法則性」—階級の力である。帝国主義運動の制約性と攻撃的階級運動(革命戦争)の逆制約の能動性、この二つの制約性が「現代過渡期世界」における階級闘争のモメントなのである。「三プロレタリア」における階級闘争の結合の上に革命路線のテーゼが指定されるのではなく、「後進国反帝植民地革命戦争」—「社会主義戦争」を、「反帝プロレタリア革命戦争」の主導的展開をもって「世界革命戦争」へと揚棄する革命路線の向上過程をこそ登場しなければならない。また、「三プロレタリア階級闘争論」の水平主義は、所謂「根拠地国家論」と「共産主義経緯革命論」に典型的である。「根拠地国家論」の現代過渡期世界における世界革命戦略上の位置は、後進国「反帝植民地革命戦争」の後方としての場所的契機としてあり、「プロレタリア革命戦争派」の根拠地は「党」—階級の契機として組織された近代工業労働者—革命的プロレタリアートである。我々は「後進国」における「社会主義革命派」ではなく、その歴史的發展段階が支配階級として組織された武装プロレタリアートを準備する「先進国帝国主義国家」における「プロレタリア戦争派」なのである。この区別と連関性こそ我々は留意しなければならないのである。この事に無自覚かあるいはその客観主義故に、塩見氏は「第三世界革命派」に屈服するのである。とりわけ「共産主義経緯革命論—プロレタリア独権立」への傾倒は、その悪しき傾向を満天下に晒している。「共産主義社会」の表現をめざす「社会主義国家」にとつて、「共産主義経緯

革命」の路線は、不可避的な選択としてあるし、当為の課題である。そして、「世界革命戦争戦略」上における「共産主義継続革命」の戦略的物質化は、まさに「社会主義戦争」としての国境の突破と、「反帝プロレタリア革命戦争」への合流、「世界革命戦争」としての揚棄としてそれであるし、それしかない。」

塩見氏のこの水平主義、客観主義が、「一向過渡期世界論」の「三つの世界論」への溶解を、「三ブロック階級闘争論」の「第三世界革命論」への屈服を、「反社帝論」の「反スタ主義」への乗り移りを如何に準備したかについては後段より詳細に論破してゆく、なお、最

第二回中央委 政治報告(続)

第三節 中央集権—非合法党の組織戦を全戦線に拡大し、国内革命戦争を勝利せよ!

一中委で採択された「当面の戦略スローガン」に凝縮されるその総路線を行動綱領として、一年有余の我が党の政治的、軍事的、そして組織的な前進と強化は、現在の日本における革命的諸グループ(党派)に対して、方針的政治的、軍事的実践という、組織において確認される、その大言壮語でない現状として、我が党の圧倒的な主導性、前進性を示している。我々は、あえてこう断言しうるのである。日本における完全地下非合法組織は我々のみである。日本における党としての革命軍事組織は我々のみである。そして、日本におけるプロレタリア社会主義革命の革命党共産主義政党政党は我々のみである。我が党の非合法活動・軍事活動・政治工作、その集中としての党組織戦は、完全に日本の政治戦線の地下からの「赤い手」として、プロレタリアート・人民を確実に政治的に導き動かしているものであり、そして、また確実に帝国主義ブルジョアジー・国家権力に対する一歩一歩の抵抗・反撃そして撃破・殲滅の闘いを現実のものとして実践しているのである。この闘いの中で、我が党の革命的実践が生き

近のプロカク政治の「大衆運動主義」——「依拠路線」が、赤軍派十年の獲得した歴史的栄光、その革命的高地に泥を塗るものであり、多大な共感を寄せた広範な兄弟友人同志諸君に疑念と失望の輪を広げている。「プロカク」派諸君は、今一度「一向過渡期世界論」を再構築し、不拔の「プロレタリア革命軍」として鍛練し、武器をとり、出撃しなければならぬ。

我々は、「自国帝国主義を打倒する」プロレタリア国際主義の立場から、「現代過渡期世界」の国境を突破する思想性を今一度復権し、まさに、世界武装プロレタリアートの最前衛として飛翔するであろう!

ば、それで「党派」であるなどという十年遅れの大衆運動前衛小ブル民主主義派の諸君は、一度捨てられたゴミ箱の中で、ゴミ箱ごと、階級闘争の焼却所で煙のごとく「天国」に舞いあがって行くだけであろう。我々は、いかに困難であろうとも、一度戦取したこの「革命の大道」を自信と勇気を持って一歩一歩前進するのみである。一切のブルジョアの「自由」など存在しなく、得たブルジョア制下に置かれた共産主義集団としての我が党・黨員達は、鉄の規律のもと、共産主義者、共産主義者としてののみ生きる事で、党の絶対的圧倒的統制・指揮のもと、プロレタリアの勝利と栄光の日へむけて、不滅の固い共産主義的政治軍事闘争を、共産主義の中で、党の中で、そして階級闘争の中で、その中でのみを生産して、日々、この激烈なる戦時を闘い続けている。共産主義戦士、赤軍兵士、つまりは共産主義者のみが、明日の地球をまわすのである。

全世界のプロレタリアート・被抑圧人民は我が党に結集せよ!
×××××の下に整列せよ!
革命軍共赤軍に入隊・入軍せよ!

今日における社民から日共・カクマル、そして新左翼「諸派」、および旧赤軍派残党諸派の全てが、小ブル日和見主義者—民主主義諸派として、「社会主義—共産主義」の「為の」闘いから戦術・組織を規定して階級的闘いを展開するのではなく、「資本主義の「結果」に対する闘い」としてしかその一切の闘争—陣線を現実化し得ないその徹底した自然発生性—民主主義の限界に対して、我が党は、自己の組織を、自己の戦術を、そして自己の革命戦略—総路線を、一貫して、「社会主義—共産主義」の「為の」闘い—からのみ規定し、統制し、現実の党そのものの存在が共産主義であり、共産主義を実践化するものであり、そして共産主義を産むものであり、そしてまた同時に、共産主義へ向けて資本主義諸関係を揚棄・止揚してゆくものであり、かつ資本主義のプロレタリア独裁としての暴力装置である国家権力—権力軍を打倒—解体してゆく闘いを闘い抜く、政治組織

た階級闘争を通じた検証・発展として、綱領(規約)確立の闘いも大きな成果を修め、その表現として、真の革命党の最高指導部としてある「中央司令部(政治局)」の建設は、得に全国に世界党の党としての建設のそれとして、ほぼ日程にのぼりつつある。我々は、近い将来、党名の変更を含め、この事を全世界のプロレタリアート・人民に、各国の党支部の登場も含め、中央司令部員自らが、世界的手段方法でもって明らかにするであろう。我々の党建設・党は、得に世界党・単一党としてのそれであり、この間右往左往している、ただ日本のみの、しかも一部地域の、ちっぽけな、気持ちだけの「党派」、サークルの、無内容な目先だけの合併や野合での、いわゆる「派」形成の党建設ではないのである。弱少グループの大前進の今日では、「党派」建設など、もはや階級闘争に世界革命戦争の大前進の今日では、エピソードにも、笑い話にもならないのだという事を、その種の「諸党派」諸君は、「綱領一致」と無実践の言語共産主義者諸君は、もうささとも良い頃である。ブント(軍共同)を頭におけ

軍事組織に共産主義権力として階級闘争を唯一闘う。共産主義運動の「二重性」としての「共産主義の实体」と「共産主義の「為の」運動」の両面を、現実的階級実践の中で具体化しつつ、その中でイデオロギー・共産主義思想に共産主義を日常存在の中で定立化してゆく、実体的共産主義集団に勢力に権力である。その中、自らの階級—党の死滅までも内包する、共産主義そのものである。

民主主義諸派の、いわゆる共産主義を遠い彼方に追いやり、それを単なる「言語」と「抽象」としてのみの「綱領」にとじこめてしまい、その綱領は、すなわちブルジョアイデオロギーの常套手段としての思想—綱領の「お題目」化という、共産主義運動のまったくの墮落・腐敗を、単なる「結果」への闘いとしての、自然発生的で、気分的な、反帝民主主義闘争のいわゆる大衆昂揚一般に、すなわち非階級の人民一般の闘いに、自己をせいぜいのところその闘争の指導部にしか位置付けず、それへ解消させる、社会主義を民主主義に解消させ、党を大衆に解消させ、現在の闘う大衆が、先進的プロレタリアート・人民が切実に要求する、社会主義への道、社会主義の為の闘いからの戦術的指導を一切放棄する、それに何ら応えきれない、その様な、大衆運動主義者とは、自己の党と、党の闘いと、党の為の闘い、すなわち、共産主義運動、共産主義主体、つまりは共産主義でもって、はつきりと一線を画するのである。

その事でもって初めて我々は、世界の闘うプロレタリアート・人民および諸党派—国家との、結合と連関の止場、あるいは世界党—単一党建設へ向けた党派闘争が闘い得るのである。アジア人民の階級的昂揚にのみ驚き、ただただそれに拝跪し、そこから中国共産党—ベトナム労働党全面支持一般を語る部分は、現在の階級闘争の複合過程とその中で権力闘争に党派闘争、すなわち社会主義革命闘争(建設闘争)の内実を一切見ることのできない部分であり、また例えば中国革命の発展と過渡性としての「教育革命」と「革命外交」とりわけ、対外戦略から規定される反米闘争の後退、日米安保体制の積極的評価)のそれぞれ連関、革命性と反動性が見抜けず、党建設の主体性を欠落させた党の党的従属という、まったくの解党主義に

陥り、あるいは国家資本主義段階から社会主義への道を、膨大なブルジョアの官僚群を生み出し、その生産関係を規定支配される事で、將に「革命の敗北」と「ロシアボルシェビキ党」の「党の限界」としてその社会主義への道を閉ざしたロシアソ連の批判のあまり、ドラスティックな階級激突の中で、一面のソ連支配拡張主義が他面では「革命の輸出」でもあり、それに独自の「世界戦略」をO.L.A.S.ゲバラ路線以降堅持するキューバ共産党の「國際義勇軍」のアンゴラ進撃であるという、アフリカ—中近東状況を軸にする新たな、將に第三次世界大戦—最終革命戦争の前夜状況を読み切らず、これらに対して、しかも大部分の、完全なる一國主義—近視眼主義者達の、今日の右往左往とは、我々の世界革命戦争の総路線でもって、一線と彼らへの批判を明確にするのである。中国共産党、ソ連共産党等、世界の全ゆる部分に対して、我々は、我々自身の党の立場から対処するのであり、それを規定するのは、ただ共産主義—社会主義への戦略のそれからのみであり、世界プロ独樹立への戦術のそれからだけである。それに照らし合わせて、一步でも革命が前進するなら断固として評価支持、結合を勝ちとるし、それが一步でも革命を後退させるものなら、批判—対決の立場を明確にするだけである。將に、日本—世界の全ての動向は、党が規定し、党が決定を下すのである。我々は革命に有利だと思ふ事はいかなる事も躊躇なく行なうし、不利だと決定された事は、いかなる理由があろうともそれを行なわない。我々は中共を、ソ共をそして世界の革命党派とその人民を、支持し批判し、そして結合し、尚かつその一切を、我々が、我が党がそれらを指導する立場に立つ。それが、世界党の立場である。今日のこの任務と目標を唯一達成しうるのは、我々、我が党のみである。全党—全機関—全党員—全細胞、そして全戦線はこの闘いを全力で貫徹しなければならない。

第一に更なる革命党の、非合法—中央集権—地下党としての建設であり、秘密細胞—軍事組織—職業革命家の党としての党建設であ

型を、全戦線を自ら武装させることでもって、すなわち革命武装勢力として、整列再編、武装、組織化する事である。党の地下非合法指導と、我が軍事組織としての党の具体的実践的、軍事における指導・教育・訓練を通じて、大衆戦線のその中から大衆戦線の指導部として、戦線指導カイドルの地下非合法の建設と大衆戦線の指導力を指導せねばならない。これが、日本における革命軍—赤軍の発展拡大であり、かつ他方での全人民の武装の現実展開である。この闘いも党の指導抜きには決して闘い抜く事はできないのである。今日すでに大衆闘争そのものが、敵との直接的な軍事的対決—武装決着を大衆闘争それ自身として要求され、その中で自然発生的な武装の問題が、たとえば個々の独立戦闘団という形で東アジア反日武装戦線—狼一等を典型的に登場させたり、あるいは各戦線、組合等が独自でそれぞれの闘争形態に依じた武装—武装闘争を登場させており、このような形態をして登場して来る各種の陣営に、階級的軍事、階級的武装革命的軍事闘争の質と実践を注ぎ込み、整列再編させ、かつ内的な階級性をその軍事の領域でも目的意識性として注ぎ込み引き出されねばならない。武装デモ—街頭激突・制圧—占拠戦—暴動闘争・ゼネストそしてゲリラ戦、これらの闘争をすでに大衆闘争はその自然発生的な要求として提出し、尚かつ直接的には政治治安軍をたえ個別でも打ち破らねばならないという状況下で、その初步的段階を實踐しつつある。このゲリラから大衆武装闘争・暴動・ゼネスト・蜂起に至る一切の大衆的軍事—武装闘争を我が党はその指導部として、その武装闘争そのものを闘いつつそれを指導し、かつその闘争に最も適切な戦術と組織を指導実践しつつ、大衆武装闘争そのものを発展させつつその内部にその戦線—大衆武装闘争それ自身の指導機関を地下非公然にいわゆる政治軍事カイドルの育成を通じて革命武装勢力の建設として推し進めなければならない。

そして第三に、この革命武装勢力の大衆的結合を、特に革命軍—赤軍への結果統合として勝ち取らねばならない。この大衆武装—革命勢力—革命軍（赤軍）は、いわば民兵—地方軍—正規軍という構造を

る。全ゆる戦線、大衆闘争の背後に、地下に、裏側に、秘密裡に、注意深く、しかし大胆に、党を、党細胞を、党協力者網を建設・配置せよ。軍事組織としての党の建設を、大衆闘争の最前線に、プロレタリアート人民の全ゆる階級闘争の表われの中に、將にそれを止揚するものとして、階級政党—革命政党としての我が党を建設せよ。この建設そのものは、將にブルジョア独裁権力に対するプロレタリア独裁権力の樹立の闘いであり、国家権力に対するプロレタリア権力の攻撃であり、そして政治治安軍に対する革命軍の戦争である。この闘いは、決して「平和」に、安全に闘われる事はないし、將に血みどろの熾烈戦の全ゆる形態での戦争—革命戦争の中でのみ貫徹されるのである。党は、社会主義—共産主義—革命軍—革命軍の革命闘争—権力闘争—政治軍事闘争を全ゆる戦術でもって闘う事を第一とし、第二にその大衆闘争そのもの、自然発生的なそれ自身民主主義運動である抵抗闘争、全ゆる帝国主義の諸動向に反対・抵抗、それを阻止打倒する闘い、すなわちブルジョア独裁—資本主義の表われ結果に対する一切の闘いを全戦線にわたって、それ自身の中で、それを政治闘争として指導する為に闘うのである。これが党の建設であり、党の任務である。この為の党の地下体制としての建設は、全ゆる部署に全ゆるところに、単にプロレタリアート人民の中にとどまらず、ブルジョア独裁権力の中枢、政治治安軍—政治警察、ブルジョア独占企業から、諸政治グループ、民主主義、政党、党派のいたるところに、將にところまわらず、まんべんなく、しかも秘密裡に、党を、党細胞を、建設・配置しなければならない。そして今日それが成功しているのは我々のみである。確実なる権力闘争—軍事活動が着実に闘い抜かれていっているのは我々のみである。敵は一切その陣営組織が察知されていないのは我々のみである。この事は、党と、党としての最大の唯一の判断基準であり、これを抜きにした革命党は革命党ではない。我々のみがこの革命党の第一の基準を今日パスしているのである。諸雑派は、我々が細胞を配置し、裏側から指導する単なる戦線にすぎない。

第二に、政治闘争—軍事闘争の最大の軸たる革命軍—革命軍事陣

現在の実践してゆくものとして建設されてゆく。そしてこの二種の軍隊のそのいづれも、党が軍事組織の非合法地下革命党が指導し、政治軍事闘争—権力闘争の目的意識性として結合止揚させつつ、一貫した権力闘争—共産主義運動として組み込まなければならない。各戦線—二種の軍隊そのものを党へと領有する事を通じて、現在のには、この二種の軍隊の統合司令部としての正規軍は、我が党とその党自身の政治軍事カイドルたる中央軍によって建設され、これ—若干の（真に戦闘を展開させ得るしかも完全非公然な）戦闘団グループによって「統一革命軍—赤軍」として確立登場してゆく。我が党の結成する唯一の党の統一戦線も、この統一革命軍—赤軍としてのみ統一戦線の実体があり、これは革命戦争統一戦線—革命戦線軍であり、それ以外の非武装で公然とした、しかも合法的な、大衆闘争上の統一戦線は存在しない。現在この統一革命軍—赤軍、すなわち革命戦線軍を實踐化しうるのは、我が党と若干の戦闘団ではない。

第三に、大衆闘争のそれ自身をその内部で大衆闘争として闘い、かつその闘いを政治闘争として権力闘争として、すなわち共産主義への止揚の闘いとして指導し抜く事である。一切の反帝闘争、大衆闘争、民主主義諸闘争を我々は指導・闘争し抜かなければならない。資本主義の矛盾のあらわれを、プロレタリアート人民の悲憤・苦悩の根因を暴露し、それへの大衆的憤激・反抗の闘争を、その現場でプロレタリアート人民の中で、彼らと共に徹底して闘い抜き、帝国主義の全ゆる帝国主義的諸政策に反対し、それを阻止し、それを打ち破る一切の闘いを、大衆の中で闘い抜かなければならない。その階級矛盾—帝国主義支配の表われに対する即自的な大衆抵抗闘争の中で、真の階級的ヒラメキを引き出し、プロレタリア階級性を注ぎ込み、そして共産主義政治を外部注入する事で、一人一人を共産主義者として唯一の未来への現在の存在—人間としての共産主義集團を、党への結果を通じて勝ち取らねばならない。ブルジョア—帝国主義の本質は決して闘いの実践を抜きにして、理論上のわかっ

た様なお説教では決して大衆の中に暴露されるはずもないし、闘わない大衆が、頭の中だけで自己の階級性をつかみ取るはずもないのである。どの様な形態であろうとも、いかなる手段を用いても、ブルジョアジー・帝国主義に対する闘い、一個一個の、現場での確実な反撃・抵抗の闘いを通じてのみ、その本質は暴露され、また自己の階級性を引き出す事ができ、そして党のイデオロギー的暴露・宣伝・煽動は、闘争実践として現実化されるのである。この闘いを抜きにする、日和見主義的な、しかも組織手段とする様な党派は遠からず大衆闘争の荒々しさの中で踏み消し去られていくであろう。かつての日共がそうであり、協会派・カクマルの今日の姿であり、新左翼諸派の明日の姿がそれである。地下非公然からする、黨員・党細胞による党の指導の中で、この大衆闘争は大きな政治闘争の一環として、闘争そのものが、ブルジョア独裁権力を打ち破る、「正規の攻囲」である。いかに自然発生的、即自的であろうとも革命党はそれを権力闘争の大きな陣型の中へと整列・再編し、それぞれ闘争の徹底化、いわば「革命的敗北主義」戦術の中で、たとえその個別戦線は個別としては敵の総力によって押し止められようとも、全戦線への波及性として、政治闘争への発展として、党陣型への止揚として、決して恐れる事なく、大胆に、全ゆる武器でいかなる手段をとろうとも、大いなる闘争をブチ抜かなければならぬ。その最先頭に党は黨員は指導部として戦士として党の旗をひるがえさせねばならない。

以上が我が党の今日的任務である。

同志諸君！ 兄弟戦友達！

今日の我が党は将にすばらしい情勢をむかえている。敵は混乱し、動揺し、そして敵の補完物たる民主主義者どもも、右往左往の状況であり、しかもプロレタリアート・人民の憤激・反抗は留まるどころをしない。革命的階級分化は、様々な形態で登場している。

そして、かつての激動期の敗北に対して、今度のしかも最後の敵突期には、プロレタリアート人民の指導部としての、我々、革命党という共産主義が存在する。いかに闘いが困難に見えようとも、世

界的には、大局的には我々に圧倒的に有利である。我が党の政治軍事闘争を、党の旗を先頭に立て、階級軍団革命軍として、最後まで革命の赤旗を掲げつつ、大闘争、大激戦、大戦争を闘い抜け。一中委以降の、情勢の変化と我が党のその中での更なる革命的再編・発展は、我々の総路線の正しさを、唯一の革命性を増々鮮明にしている。

同志諸君！ 兄弟・友人達！

更に革命戦争を発展・拡大せよ！ 敵を確実に殲滅せよ！ 赤色報復戦の「血のボール」を敵中枢・敵部隊にふりおろせ！ 敵の血でもって我が党一軍を武装せよ！

革命の血しぶきの中で、我が革命党——××××××を強化発展拡大せよ！ 全てのプロレタリアート・人民を我が××××××に結集させよ！

世界革命戦争勝利！ 世界同時革命勝利！

世界党——世界赤軍——世界革命戦線の建設万才！

××××××の勝利万才！ 万万才！

赤軍

第14

発行 共産主義者同盟赤軍派日本委員会 宣伝局

定 価 500 円